

キヒメグモの色彩多型

久保寺 みか*・池田 博明**

Colour Polymorphism in *Achaearanea asiatica*
Mika Kubotera* and Hiroyoshi Ikeda**

はじめに

小田原城内高等学校敷地内に初めてキヒメグモ *Achaearanea asiatica* の集団を見つけた時、私達は最初にそれをキヨヒメグモ *Theridion* sp. だと思ってしまった。

キヨヒメグモは岸田久吉氏が和名だけを残したまま、記載しなかったため、言い伝えで同定されたいわば正体不明のクモであった。言い伝えによると、キヨヒメグモはキヒメグモ程度の大きさで、茶褐色の地色に黒色斑のある腹部を持つクモである。ところどころに白斑もある。不規則網にはヒメグモの様なシート網はない。不規則網内に数個のしづく型の卵のうを吊すことがある。

これらの特徴を持ったクモを8月に城内高校内で見たのだから、まさかそれがキヒメグモの方だったとは夢にも思わなかったのである。なぜならキヒメグモは「早春に成体」が採集されるクモだというし、斑紋も赤褐色の地色に三点の黒色斑があるだけだというのだから（松本、1973：八木沼、1986）。しかし、調べていくうちに明らかにキヒメグモの特徴を持つ個体も見つかるようになり、ついにはすべてがキヒメグモであることがわかったのである。

実際には、キヒメグモは早春と挽夏に発生する色彩多型種であった。色彩は典型的なキヒメグモ型（黒色斑の少ない、明色型）から中間的な段階のものを経てキヨヒメグモ型（黒色斑の多い、暗色型）までが生息しているのである。

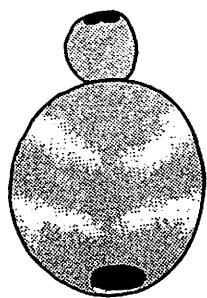
本調査は池田の指導で、久保寺が城内高校在学中の1986年と1987年の夏休みに行ったものである。キヒメグモの調査地はすべて神奈川県小田原市の小田原城内高等学校敷地内である。調査結果は当該年の東京蜘蛛談話会の合同例会で口頭発表している。稻葉茂代氏（現所属神奈川県立秦野高等学校）は調査に協力してくださった。また吉田哉氏（山形県山形市立第四中学校教諭）にはキヒメグモのオスを同定していただいた。

1. キヒメグモの色彩多型

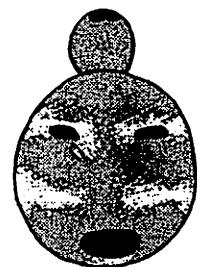
1987年に城内高校で見られたキヒメグモのメスの色彩変異の例を図1に示した（久保寺原図）。明色型から暗色型まで7型を示したが、区分は便宜的なものである。B～Fまでの脚の色彩変異は記録していない。連続的に変異していることがわかる。オスはキヒメグモ型のもの（A）だけしか生息していない。このようなメスに見られる連続的な変異はスエーデンのサラグモの一種 *Pityophyantes phrygianus* でも知られている。オスには変異がないことも同様である。このサラ

*現所属青山学院大学理学部物理学科

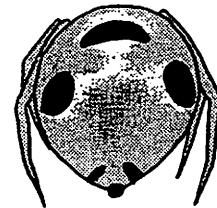
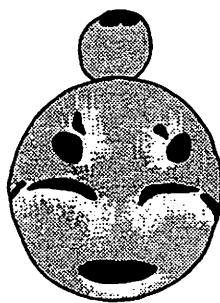
**神奈川県立小田原城内高等学校



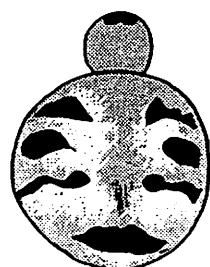
A



B



C



D

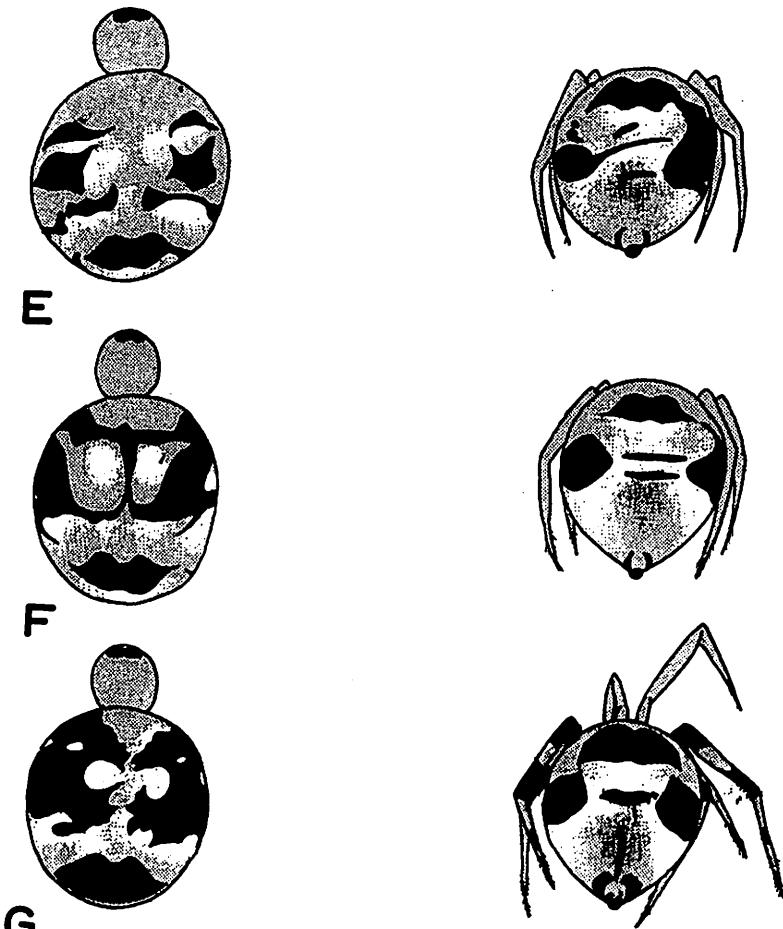


図1. キヒメグモ♀の色彩多型
(A～G. B～Fは、脚の紋様を描いていない。)

グモには脚にも背面に対応した色彩変異がある。したがって、キヒメグモでも脚に色彩変異があることは予想される。

キヒメグモの暗色型はキヨヒメグモと称されていたクモにそっくりであり、これまでキヨヒメグモと同定されていたクモはすべて再検討の必要が生じてきた。なぜなら、本調査以前にキヒメグモの暗色型は知られていなかったし、卵のうの形や網の形は両種で、まったく同じだからである。

とはいえる、キヒメグモとは別種のキヨヒメグモが生息していることも確実であるらしい。私達の調査でもキヨヒメグモと思われる個体が採集されており(採集地は神奈川県平塚市吉沢)，そのメスの外部生殖器Epigynumはキヒメグモの暗色型とは異なっているからである(図2. 池田原図)。ただしキヨヒメグモのEpigynumはこれまでどこにも報告されておらず、過去の同定は直感的に色彩や斑紋に頼っていたところも多いため、標本の残っていない記録のキヨヒメグモがキヒメグモの誤りの可能性があることに変わりはない。このような事情からすると、キヒメグモがAchaeacarea属であれば、キヨヒメグモも同属であろう。

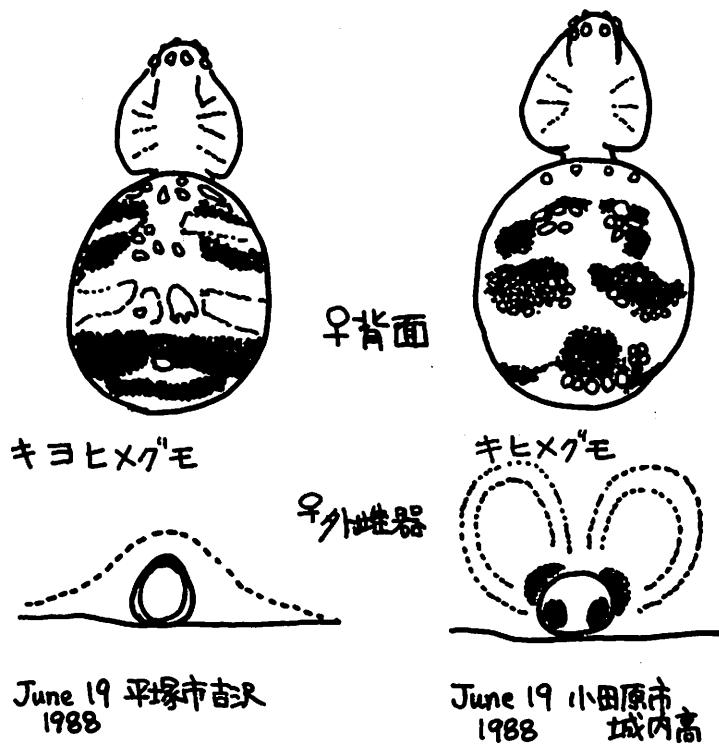


図2 キヨヒメグモとキヒメグモ

2. キヒメグモの生息密度

1986年の8月19日にキヒメグモの個体群密度を調査したところ、 $25\text{頭}/\text{m}^2$ であった。この密度は著しく高い。この高い密度は翌年も続いたが、1988年には激減してしまい、 $0.7\text{頭}/\text{m}^2$ になった。減少の理由ははっきりしない。1986年のキヒメグモは城内高校のバイオニアだったのかもしれない。生息地の土手に他種のクモはほとんど見られないほど、キヒメグモばかりだったからである。それが1988年にはヘリジロサラグモやウズグモなども同じ場所を占めるようになってしまった。

また、暗色型は明色型よりもずっと個体数が少なかった。暗色型が少るのはスエーデンのサラグモの一種でも同様であるが、その原因は分かっていない。各型毎の密度や変異の程度を量的に調査する計画は、個体数の激減で頓座してしまっている。

なお当地のキヒメグモの成体出現期は主に5月と8月の年2回である。

参考文献

- Gunnarson, B. 1985. Phenotypic variation in dark coloration in *Pityohyphantes phrygianus* (C.L.Koch) (Araneae: Linyphiidae). *Bull. Br. Arachnol. Soc.* 6: 369-374.
- 松本誠治. 1973. キヒメグモについて. *Atypus*. 61:9-14.
- 八木沼健夫. 1986. 原色日本クモ類図鑑. 保育社. 大阪.

オオツチグモの飼育観察記

牧 孝 匠

オオツチグモは、原蜘蛛目(トタテグモ類)オオツチグモ科(*Theraphosidae*)に属する大形のクモである。筆者は、1987年7月と1989年4月に各1個体のオオツチグモ(原産地と種名は不明)を入手し、飼育している。そこで、飼育をした結果観察されたことを簡単に報告したい。はじめに飼育中のクモの特徴と飼育方法を述べ、次に観察したことがらを記述する。

(1) クモの特徴

① 1987年7月入手個体(個体Aと称する)

体長約60mm。頭胸部は黒味がかった褐色。腹部は全体がビロードのような黒色の微細な毛でおおわれている。そして長さ約5mmのクリーム色の長毛が密生している。歩脚は基節から腿節まで黒色。膝節から先は黒の地にうすい白色の縦線がはいった色彩であり、腹部と同様な長毛が密生している。(図1)

② 1989年4月入手個体(個体Bと称する)

体長約50mm。頭胸部は頭部域が黒色。胸部域がうすい褐色。腹部は個体Aと同様な毛でおおわれ、長さ約5mmのオレンジ色の長毛が密生している。歩脚は黒色または薄墨色だが、脛節のみは明るい地にオレンジ色の長毛が密生し歩脚の他の節と著しいコントラストをみせ美しい。(図2)

(2) 飼育方法

飼育容器は、昆虫飼育用大型プラスチックケースを使用し1個体ずつ飼育した。餌はスズムシ・クロゴキブリ・ヤマトゴキブリ・ワモンゴキブリ・フタホシコオロギを与えた。水分は小さなシャーレに脱脂綿を入れて水を満たし、飼育容器内に置いた。気温が20℃を越えて暖かくなった6月ごろから10月初旬ころまでは、室内に置き、気温が低い時期には恒温器に収容し25℃の温度で飼育した。

(3) 捕食

オオツチグモは、コオロギ・ゴキブリなど体長30mm前後の比較的大形の昆虫を好んで捕食した。クモは容器の底部で静止し、ゴキブリなどが接近してくると虫の動きを察知してすぐに飛びかかり牙を打ち込んで捕らえた。しばらく餌をくわえ続け、ときおり上アゴを動かしてかみ碎く。ゴキブリでは、牙によって体が2つに切断されてしまうこともあった。

次いでクモは餌をくわえたまま糸いばから糸を出しながら回転し、自分の周囲に糸をうすぐ

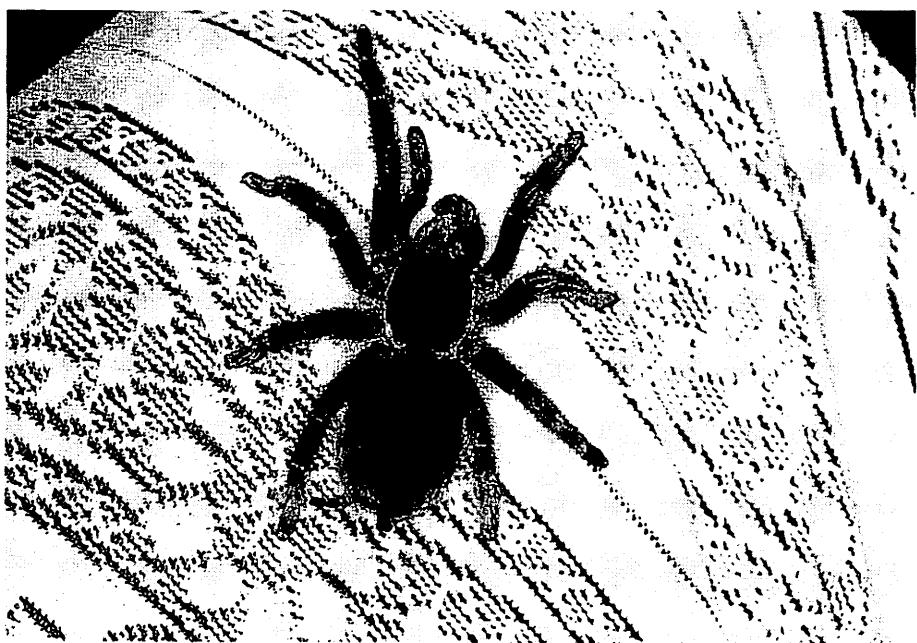


図1 ソファの上を歩行中の個体A



図2 飼育容器内の個体B

かけていった。クモはやや静止した後、さきほど糸をかけた所に餌を置き、体を反転させて腹部後端を餌に向け、腹部を左右に動かしつつ餌全体にうっすらと糸をかけていった。この時長く発達した糸いばは餌の体をなめるように動き、糸でおおっていった。こうして餌を糸でおおうと、クモは再び反転して餌に向き直り、上アゴでくわえてかみ碎きながら摂食し始めた。ワモンゴキブリなどの大きな餌も粉々にかみ碎かれ、キチン質の外骨格以外はすべて消化吸収されて径10mmほどの茶色いボールとなってしまった。

食べがらはほとんど容器底部のコーナーに捨てられた。一定の捨て場をクモは認識しているらしく、いくつかの食べがらがコーナーにまとめて捨てられていた。クモが食べがらをコーナーまで運んで下におろし、1対の触肢で食べがらを前方に押し出すようにして容器壁面におしつけ、捨てる行動を観察できた。クモの摂食時間はほぼ5~6時間だった。

飼育したクモのうち、個体Aはよく捕食し1989年3月17日から6月16日までの92日間にヤマトゴキブリ22匹・クロゴキブリ1匹・ワモンゴキブリ10匹・フタホシコオロギ13匹、合計46匹の昆虫を捕食した。

(4) 基節腺・顎葉腺からの排出

1989年6月25日17時30分、個体Bが飼育容器壁面に垂直にはりついて静止していたのでクモの腹部を観察した。その時、左右の第3脚基節と胸板との間に径1mmほどの透明な液滴はしだいに大きくなり、径3mmほどのしづくとなって飼育容器底部に落下した。それから18時11分までの41分間に、右基節から6滴、左基節から8滴の液滴が排出されしづくとなって落下していった。液滴は無色透明で水のように見えた。1つの液滴が基節から現れてしづくとなって落ちるまで、約60秒ほどだった。17時30分から18時11分まで、平均3~4分の間隔で液滴は基節から現れては落下し、容器の底部には2つの小さな水たまりのようなものができるていた。それ以後は、19時ころまでに左右の基節で3滴ずつ排出され、20時ころまで断続的に2~3滴排出された。そして20時すぎに液の排出は終った。この間、クモは少し移動したがほとんど触肢と第1・2・3脚で容器壁面にもたれかかり、体を垂直に近い姿勢に保っていた。液滴の排出は第3脚の基節からのみで、他の歩脚からはまったく行われなかった。

また、20時すぎクモの触肢顎葉付近からしだいに無色透明な液滴が現れ、ゆっくりと大きくなり径4~5mmのしづくとなって、20時17分ころクモから離れて落下した。これは顎葉腺からの排出ではないかと思われた。

前日の6月24日、クモは腹部が大きくふくらむほどかなり多量の水を飲んだ。このことと、これらの腺からの液滴排出とは何か関係があるのかも知れない。

なお、基節腺からの液排出量を調べたところ約0.35ccであった。

(5) その他の観察

オオツチグモは、最も大形のクモとしてよく知られている。そしてその大きさ・姿から毒グモではないかとして、一般に恐れられているようである。筆者も飼育当初はかみつかれるかも

しれないと思いつつクモには触れないでいたが、飼育しているうちに見かけほど恐ろしいクモではないことが分かってきた。クモの腹部や頭胸部にさわってもクモはほとんど何の反応も示さないでじっとしていた。そこでときおり飼育容器から出して、手にとったり室内を散歩させることもできるようになったのであった。

図1は、ソファの上を歩行しているクモである。ソファはいごこちがいいのか、歩脚を縮めて静止することもあった。ソファでおちついでいるクモを見ると、とてもクモとは思えずむしろネコのような感じがしたのが不思議であった。オオツチグモは、意外におとなしいクモといえるかもしれない。

ただし、クモがかなり空腹の時は注意を要する。餌が手に入らず2カ月ほど絶食させた時には、クモの歩脚や触肢にピンセットなどで軽く触れただけで、クモは歩脚を大きく開いて飛びつき牙をつきたてようとしたことが何回も観察されたのだった。その時クモは第1脚の末端毛束でピンセットにしがみつき、離そうとしなかったほどだった。

オオツチグモの牙は、個体Aでは長さが10mm以上あり、アゴの力は大きなワモンゴキブリ成虫を完全に切断してしまうほどである。人間の皮膚も簡単につきとおせることはまちがいない。かみつかれればかなりの出血があると思われる。また、牙の先端には毒腺の開口部と思われるくぼみも見ることができる。毒のためかどうかは不明だが、クモに軽くかみつかれた体長30mm近いワモンゴキブリ幼虫が、クモから逃げたものの翌日死亡した例を1回観察した。牙には十分注意した方が賢明だと思う。けれどもこの点に気をつけさえすれば、オオツチグモは飼育して十分に興味深いクモであるといえる。

イソウロウグモ類による卵のう捕食の観察

新 海 明*

イソウロウグモ類は、一般に盜み寄生者として知られている。この中には網主を襲って捕食したり、網糸を食べるクモがいることも知られており (Vollrath, 1984; 新海, 1988), その捕食習性は実にさまざまである。この仲間はまた、クモの卵のうを捕食することも知られているが (Vollrath, 1984; Whitehouse, 1986), 筆者が知る限りでは日本での観察例は今までなかった。筆者は1988年7月と9月に千葉県においてチリイソウロウグモ *Argyrodes fissifrons* とフタオイソウロウグモ *A. fur* による卵のう捕食を観察したのでここに報告する。

本稿をまとめるにあたり、新海栄一氏には原稿の校閲をお願いした。ここにお礼申し上げる。

<チリイソウロウグモによる卵のう捕食>

1988年7月23日、千葉県君津市にある東京大学千葉演習林へ至る猪の川林道で観察した。調査時刻は午後3時30分から午後4時30分までであった。

コクサギの枝葉間に造網していたクサグモ *Agelena limbatata* の網上部の迷網にチリイソウロウグモ(以下、チリ)がおり、そこにヤリグモ *A. saganus* の卵のうも吊りさげられていた。ヤリグモはその付近にはいなかった。発見したときにはチリはヤリグモの卵のうの壁を食い破り、穴

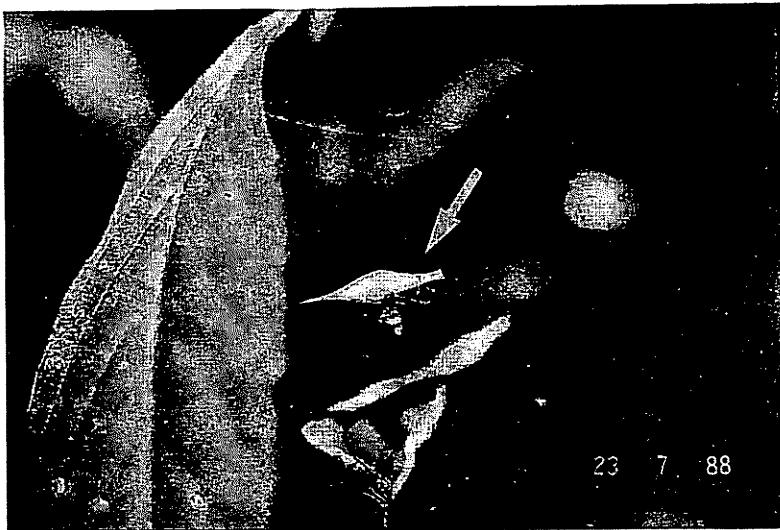


図1 ヤリグモの卵のうを食べるチリイソウロウグモ(矢印)

*国分寺市本多1-6-6

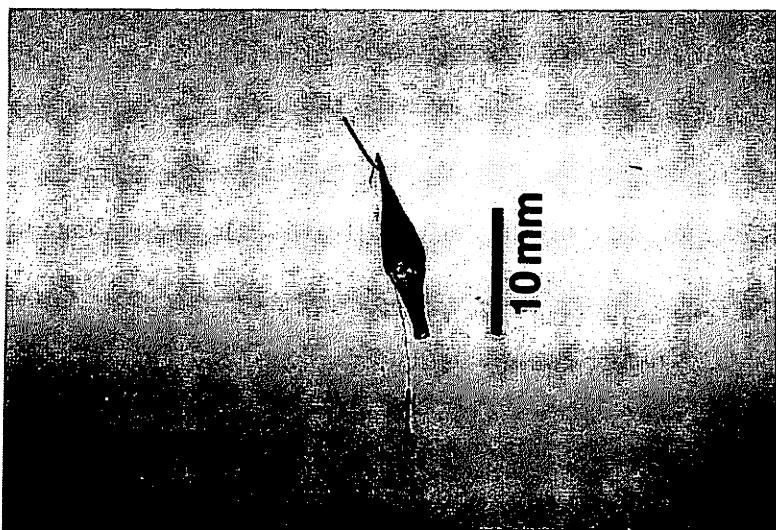


図2 チリイソウロウグモに捕食されたヤリグモの卵のう

の中へ頭胸部を入れていた(図1)。何を食べていたのかは直接は確認できなかったが、採集して持ち帰った卵のう(図2)中からヤリグモの幼体が3~4頭出てきたこと、卵のう下方の開口部(ヤリグモの卵のうは常に図2中のO点が開口して子グモはそこから出のうする)がすでに開いていたことから考えると、チリは卵のう中で化したヤリグモの子グモを捕食していたと考えられた。

<フタオイソウロウグモによる卵のう捕食>

これは、1988年9月17日に前記同所において観察した。調査時刻は午後2時20分から午後3時15分までであった。

フタオイソウロウグモ(以下、フタオ)はキャラボクの葉より吊り下がっていたシロカネイソウロウグモ(以下、シロカネ)*A. bonadea*の卵のうにとりついていた(図3)。フタオはその口を卵のうの壁に押しあてて食い破っているところであった。午後3時15分に採集してしまったが、それまでに開けられた穴の直径は約1mmであった(図4)。この卵のうもよく見ると下部に出のう口が開いており、子グモはすでに出ていたあとであった。直接観察していないので、何を食べたのかは不明だが状況から考えると子グモである可能性が高い。

すぐそばにもうひとつ別のシロカネの卵のうがあったが、これにも出のう口とは別にかなりおおきな穴(直径は約1.5mm)があいていた。どのようにしてこの穴が開けられたのか直接に見ていないので断言はできないが、状況から判断する限りではフタオによってあけられたものと考えるのが一番妥当であろう。



図3 シロカネイソウロウグモの卵のうを食べるフタオイソウロウグモ(矢印)

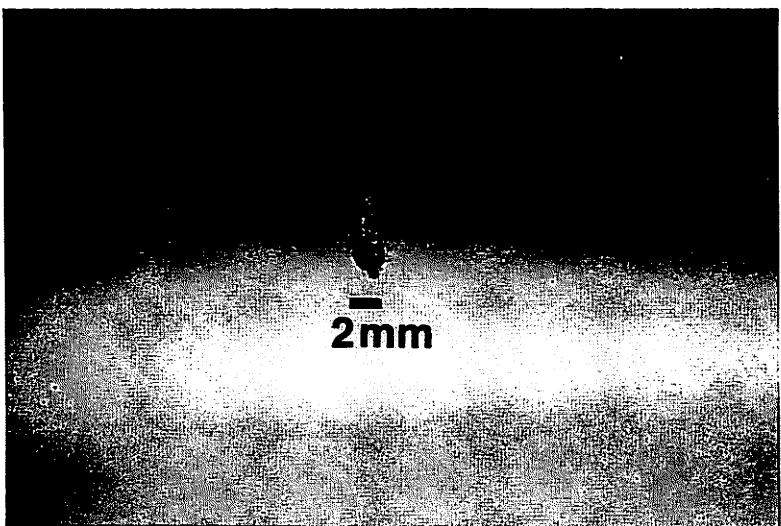


図4 フタオイソウロウグモに捕食されたシロカネイソウロウグモの卵のう

チリ・フタオの二種類の卵のう捕食例を観察したが、捕食されていた卵のうがいずれも同属のイソウロウグモ類であったという点が興味深い。二例のみの観察なので断定的なことは言えないが、イソウロウグモ類各種の生活域はその共通する捕食習性から考えると、自ずと重複があるはずである。その結果、宿主の網内やその近くに卵のうを作るイソウロウグモ類は、同属のクモによる捕食の危険にさらされる可能性も高いと言えるかも知れない。今後、さらに多くの観察例を増やす必要があろう。

引 用 文 献

- 新海明, 1988. トビジロイソウロウグモの網食い行動の観察. *Acta arachnol.*, 36 (2) : 115-119.
- Vollrath, F., 1984. Kleptobiotic Interactions in Invertebrates. In: C. J. Barnard (ed.), *Producers and Scroungers of Exploitation and Parasitism*. Croom Helm, London and Sydney, 61-94.
- Whitehouse, E. A. M., 1986. The foraging behavior of *Argyrodes antipodiana* (Theridiidae), a Kleptoparasitic spider from New Zealand. *New Zealand J. Zool.*, 13 : 151-168.

亜成体に求愛するアオグロハシリグモ

板 倉 泰 弘

コモリグモ類やキシダグモ類において、雄が亜成体の雌に求愛を行ったという報告はない。今回、野外において亜成体の雌に求愛するアオグロハシリグモ *Dolomedes raptor* Bois. et Str. の雄が観察されたので報告する。

1988年6月1日、八王子城址のふもとの城山川に設けられている第2号橋台（コンクリート製）の左岸下に雄成体と雌成体と思われるアオグロハシリグモを発見した。

15時20分：図のような状態で約50mmの距離をおいて2頭が静止していた。

16時23分：雌が右第2脚を2mm前方に移動させた。

16時27分：雄が右第1脚を、次いで左第1脚を前方に上げた。

16時28分：雄が第1脚を両側とも下ろした。

16時30分：雄が左第1脚を上げ、外側から内側に回すようにして下げた。この時点までに雄は約10mm前進した。雌が突然的に雄に襲いかかり捕獲したため、2頭を採集した。

雌は野外から別の雄を採集して室内で求愛、交接行動を観察するため、自宅に持ち帰り12×20×14(cm)のポリエチレン製の水槽の底に石を敷き、水を1cmの高さまで入れた容器で十分な量のハエを与えて飼育を行った。しかし、6月30日に成体と思われたこの個体が脱皮を行って「成体」となった。（結局、このクモはこのまま9月下旬に未受精卵を産卵して死亡した。）このことから、アオグロハシリグモの雄は雌の亜成体後期（中平1988）の個体に求愛を行っていたことになる。

キシダグモ類やコモリグモ類では、視覚には依存せずに雌成体の体表やしおり糸、もしくは雌成体に長時間接触していた物体に接触して雄が性的に興奮して求愛行動が誘導されるため、雌成体の体表やしおり糸にフェロモンが存在するのではないかと考えられている（Kaston 1936; Bristowe 1958; Hegdekar and Dondale 1969; 中平 1978; Roland and Rovner 1983）。

しかしながら、亜成体に関してはRoland and Rovner(1983)は *Dolomedes triton* の雄成体は雌亜成体のしおり糸に対して性的興奮を示さないとして、また、Hegdekar and Dondale (1969)もコモリグモ類の *Pardosa saxatilis* 等の雌亜成体を長時間接触させたる紙に対して同種の雄成体は性的な行動を起こさなかったとしている。今回観察を行ったアオグロハシリグモでは、明らかに雄成体は第1脚を上げる等の求愛行動を示していたため、亜成体の段階でフェロモンが生産・分泌されていたのではなかろうか。

参考文献

Bristowe, W. S., 1958. *The World of Spiders*. Collins, London.

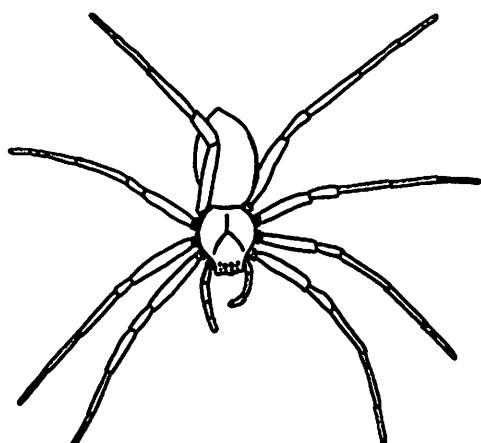
Hegdekar, B. M., Dondale, C. D., 1969. A contact sex pheromone and some

response parameters in lycosid spiders. Canad. J. Zool., 47 : 1-4.

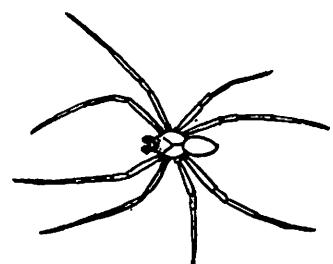
Kaston, B. J., 1936. The senses involved in the courtship of some vagabond spiders. Ent. Amer., 16 : 97-167.

中平 清, 1978. ハシリグモの雌の引く「さそい糸」. Atypus, 71 : 38-39.

Roland, C., Rovner, J. S., 1983. Chemical and vibratory communication in the aquatic pisaurid spider *Dolomedes triton*. J. Arachnol., 11:77-85.



♀



♂

キシノウエトタテグモ探蛛会報告

新 海 明

1. 100年ぶり、キシノウエトタテグモ発見される—東京大学構内にて—

去る6月17日に東京大学構内にて行われたキシノウエトタテグモ *Latouchia typica* (Kishida) 探蛛会に於いて、期待通りに大量のキシノウエトタテグモ(以下、キシノウエ)を発見することができた。

前日まで降り続いている雨も中休みとなったこの日、17名の参加者が午後3時に東大の赤門前に集合した。この中には新海栄一氏、高橋登氏、笹岡文夫氏、牧孝匡氏といったトタテグモの生息地やその生活を熟知した人たちが顔を揃えていたので、これだけでもその日の成果を予感させるものがあった。初めに、東大農学部の宮下直氏より構内の説明をしていただき、この日の有力な調査地点である三四郎池に一同は向かうことになった。その途中の医学部本部前のロータリーの植え込みで、ここ数年間朝鮮産の珍蝶であるホソオチョウの産卵が見られたとのことで、ここでその説明やら食草であるウマノスズクサの観察などをした。この時、新海栄一氏がしゃがんで植え込みの間を何やらゴソゴソと探ししまわっていたことは、そのまわりにいた数人以外は知る由もなかった。実は、このホソオチョウの説明のひとときが後のキシノウエの大量発見につながったのであった。

三四郎池は医学部のロータリーを斜めに横切ったところにある。木々に覆われて薄暗いすりばちの底に池が横たわっていた。すりばちを少し下りると一瞬ここが東京のど真ん中であることを忘れさせられてしまう。一同は早速キシノウエの採集にとりかかった。ものの5分もしないうちに板倉泰弘氏が「あった」と叫ぶ声が聞こえた。それはキシノウエの扉には違いがないのだがその中は土に埋まっていたものだった。しかし、そのすぐそばで再び同氏が扉をみつけた。今度は完全な住居であった。「100年ぶりに私がみつけたのだ」と氏が興奮気味に語っていたのが印象的だった。一同もこれに刺激されて一斉に散らばり付近の土手の上を目を皿のようにしてさがしまわった。すぐそのそばで、私も小さな扉のキシノウエを二つみつけた。そのうちの一つは扉のところまでクモがでていた。これらの一連の発見でキシノウエが東大構内にいることが判ったのであるが、このあとがいけなかった。いくら探してもいっこうにみあたらぬし、たまたま住居の扉が見つかっても空の巣だったりであった。十数名がおよそ一時間ばかり懸命に探したのであるが、結局その巣を7例発見したにすぎなかった。蘚苔と木の茂る三四郎池のまわりは夕方になるにつれていいよ暗くなっていくので、地面にある住居はますます見ずらくなつた。「ここはだめだな」と新海栄一氏、「さっきの花壇のまわりのほうにいるかも知れない」。実は、氏はすでにホソオチョウがいたという医学部の花壇で大きな扉を持つキシノウエをみつけていたのであった。「はやばやと見付けたことを言ってしまうと、皆のやる気がなくなってしまうと思ったので黙っていたんだ」との事。「さすが」と一同はア然となつた。色々な所に散っていた人たちを呼び集めて、花壇へと移動した。すると、

いるわ、いるわ、ツツジの植え込みの根元を少し探せばたちどころに2～3個の住居が見つかる。皆は俄然色めきたって、花壇の一帯に散らばり次から次へと大小さまざまな大きさのキシノウエの住居を発見していった。中には植え込みまえの道路に座りこんで熱心に観察を始める人もいて、通りすぎる学生や先生方も何事かとのぞきこんでいた。ここでは、参加した人たち全員がキシノウエの住居を発見することができ、合計43例探し出すことができた。

その後、花壇などの植え込み周辺をさがせばいるかもしれないというわけで、構内の植え込みをかなり探ししまったが、結局その他の場所では一頭も探すことができなかつた。最後に農学部の裏にある農場にも足をのばして見学を兼ねた採集をして、この日の探蛛会を終了した。

当日に確認したクモのリストを以下に記す。

<i>Latouchia typica</i>	キシノウエトタテグモ
<i>Atypus karschi</i>	ジグモ
<i>Ariadna lateralis</i>	ミヤグモ
<i>Ero japonica</i>	センショウグモ
<i>Tetragnatha squamata</i>	ウロコアシナガグモ
<i>Oxyopes sertatus</i>	ササグモ
<i>Lycosa coelestis</i>	ハラクロコモリグモ
<i>Trachelas japonica</i>	ネコグモ
<i>Phrurolithus pennatus</i>	ヤバネウラシマグモ
<i>Misumenops tricuspidatus</i>	ハナグモ
<i>Thomisus labefactus</i>	アズチグモ
<i>Helicius sp.</i>	ジャバラハエトリ

なお、採集会の参加者は以下の通り。

池田博明 板倉泰弘 稲葉茂代 大石征夫 小沢實樹 加藤輝代子 加藤倫之
笹岡文夫 佐藤幸子 新海明 新海栄一 高橋登 古浜隆 牧孝匡 宮下直
本木洋子 吉田嗣郎 (以上、17名)

2. 講演・談話会報告

引き続き午後6時からは、キシノウエトタテグモの生活史などを中心とした講演・談話会がおこなわれた。講演要旨は以下の通り。

1. トタテグモ類の生態(1) 生活史。 報告者 新海 明

キムラグモを含めたトタテグモ類の生活史をまとめた。キムラグモ、ジグモ、キシノウエトタテグモの生活史はほぼ解明されている。カネコトタテグモ、ワスレナグモはほとんど資料がなく、キノボリトタテグモではふ化時期、脱皮回数、交尾時期等が不明。キムラ、キシノウエ、キノボ

リは9月～10月に交尾、翌年の夏に産卵、ふ化し、幼体は親と共に同居して越冬する。ジグモ、ワスレナは夏まえに交尾して夏に産卵、ふ化する。どの種もオスは交尾後死亡する。ジグモは雌雄同居が見られること、交尾から産卵までの期間が短いことなどから、他のトタテグモ類と違っていた。南欧のネメシアは親子の同居期間が2～3年と長く、保育をするほか、夏眠することが知られており、日本産のものと比較するうえで興味深い。

2. キシノウエトタテグモの生活史。 報告者 牧 孝匡

4年間にわたる飼育により、キシノウエトタテグモの生活史が判明した。8月に生まれた幼体は翌々年の8月～10月に最終脱皮をして交尾し、3年目の8月に産卵した。6歳で成体になると推定される。大量に餌を与えると住居内に静止する期間（餌をとらなくなる）が長くなる。捕えた餌は住居内で食べる。脱皮も住居内で行う。成体後の脱皮も観察された。越冬中は食べない。9月下旬～10月に夜間にオスが徘徊し、暗所で15～20分の間に一瞬交尾すると考えられた。オスは交尾後弱って死ぬ。

3. 東大と岸上鎌吉氏のこと。 報告者 宮下 直

岸上鎌吉氏は明治22年に東大理学部動物学教室を卒業している。そして、農商務省に勤務したようである。クモ類の研究は在学時代に多く、卒業後はおもに水産関係の仕事（クラゲ、ミズダニ、アワビなど）をしている。動物学雑誌には（き、か）として雑録も書いている。キシノウエトカゲも氏の採集に因んだ命名である。

講演・談話会はちょうど夕食時にあたっていたため、パンなどの軽食やスナックそれに「飲み物」などを用意して、食べながら飲みながらの気楽な雰囲気の中で行われた。そのせいもあってか（？）、常にもましてトタテグモ類をめぐるさまざまな観察例や生活史上の問題点が活発に議論されたようになれた。

講演・談話会の出席者は以下の通り。

池田博明　板倉泰弘　稻葉茂代　大石征夫　笹岡文夫　佐藤幸子　新海明
高橋登　牧孝匡　宮下直　本木洋子　吉田嗣郎　（以上、12名）

ウススジハエトリの交接

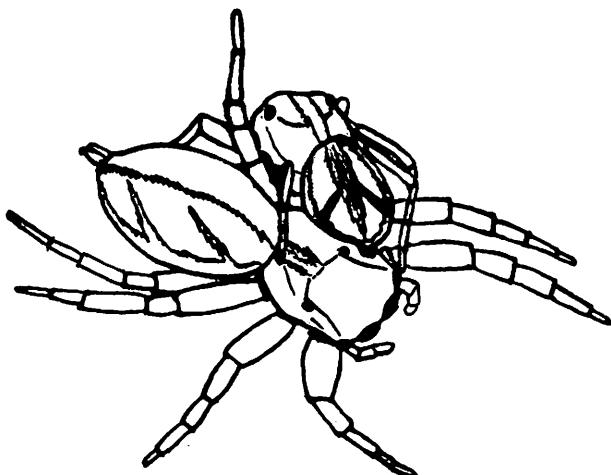
板 倉 泰 弘

1989年5月27日、八王子城社のふもとの城山川の岸辺のヤブマオの地上約120cmの葉上でウススジハエトリが交接を行っているのを観察した。その結果を報告する。

15時07分：左側の触肢が挿入されていた。交接体位は典型的なⅡ型であった。雄は雌の体軸に対して上方からみて左方に約130°また俯角約30°の角度を保って雌の背面に乗っていた。従って、雌雄の頭部は反対方向を向いていた。雌は腹部を左方に約90°回転させて腹部下面を側方に向け、雄は雌の左側の第3脚と第4脚の間を通して触肢を外雌器の方向に伸ばしていた。雌は交接中に数回歩行したが、雄は全く静止した状態で触肢の挿入を行っていた。この時点における血のうの収縮・膨張の速度は、膨張から次の膨張まで 19.5 ± 4.67 秒($N=10$, 13~29秒)であった。

16時37分：血のうの収縮・膨張の速度が時間を経るに従って遅くなり、 54.2 ± 9.85 秒($N=5.36 \sim 6.5$ 秒)となった。

16時43分：雄が左側の触肢を外し、両側の第1脚と触肢で雌の腹部を数回打った。雌が腹部の位置を元に戻し、第1, 2脚で雄を捕獲する行動を開始したため交接は終了し、雄は瞬間的に雌から1, 2cm離れた所に跳躍移動し走り去った。



最近見たこと、気づいたこと 2 題

笹岡文雄

その1

1989年の6月のある昼下がりのこと、スズメがブロック塀に垂直にとまって、何かをつついでいる様子でした。スズメが飛びさるのを待って近寄ってみると、そこには二枚貝が口を開けたようにヒラタグモの住居だけが残されていました。スズメは明らかにヒラタグモを狙ってブロック塀にとまつたようです。

また小学校の頃、自宅のやはりブロック塀に住居を造ったヒラタグモを狩りバチ（種類不明）が狩っていましたことがありました。

ヒラタグモの住居はいずれもブロックどうしをつないでいるコンクリートの窪んだすじに造ったもので、一見するとそれはうまくまわりの色に溶け込んでいました。クモにそこまでのカムフラージュの意図があったかどうかは不明ですが、少なくともその住居はスズメと狩りバチという捕食者には隠蔽効果はないようでした。ヒラタグモはよく住居の表面に食べかすなどをつけてカムフラージュをしていますが、むしろその住居そのものが逆に捕食の目標になっていることが多いのではないかでしょうか。ヒラタグモの住居はクモ自身が考えて？いるほどの効果はないという気がします。

その2

1989年の7月16日の八王子城址採集観察会のとき、アオオニグモの幼虫の網を見つけました。捕食行動を観察しようと、近くにいたガの幼虫をその網にかけました。当然クモは住居からすばやく出てきて獲物にラッピングを始めます。とここまでではふつうのことでしたが、その後1mm弱の小さなハエ？（少なくとも双翅目の昆虫）が1頭飛んできてクモの獲物のすぐそばでホバリングを始めました。そして、クモが獲物に半分糸をかけ終ったとき、それがまだクルクル回されているにもかかわらず、その糸のかかったところにとまりました。当然しばらくの間そのハエ？は獲物といっしょにクルクル回ることになりました。

この後、クモは腹がすいていなかったのか獲物のラッピングを中途半端のまま住居にもどっていました。するととまっていたハエ？もやおら飛びたつと網の近くの葉の裏にとりました。その状態のまま動きが停まってしまったので、そこで観察をやめてしまいそれから先のことはわかりません。

梅谷献二、加藤輝代子編著の「クモのはなしII」の16章“クモの餌を横どりする虫たち”的に、クモによって消化された食物を外から横どりするクロコバエ科やタマバエ科のハエのことが出てきます。日本ではこの種の報告がほとんどなされていないので、今回の観察したものがそれにあたるのかどうかはわかりません。あるいはまったく別にクモそのものに外部寄生する寄生バエだったのかもしれません。

貝の中からミズグモ

小野展嗣

東海大学教授で貝の専門家の波部忠重先生から、貝の中から出てきたというクモを2頭いただいた。見たところミズグモ *Argyroneta aquatica* の♀の成体と幼生であった。先生に詳しく伺ったところ、昨年(1988年)、招かれてソ連へ行った折、レニングラード郊外Mozhaisk の湖岸で採集した貝の中から出てきたということであった。先生によると、この貝は、湖の水草の間にすんでいるフトミズヒラマキガイ (Ram's horn) *Planorbis corneus* (Linnaeus, 1758) という巻貝で、ちょうど直径2~3cmのカタツムリをひらたくしたような形をしている。湖のヨシがはえているような場所で、藻などと一緒に、岸の方にふき寄せられていたこの貝の死んだ殻をたくさん採集し整理していたところ、貝殻の中からクモが出てきたとのことである。湖水に浮いている貝殻の中にミズグモが造網していても不思議ではないが、とにかくおかげで、ヨーロッパのミズグモの標本が手に入り、私にとってはありがたい事であった。

神奈川県で見つけた珍しいクモ

磯部達男

1989年6月27日、横浜市緑区新治町で、アシナガカニグモ *Heriaeus mellotteei* Simon ♀を1頭採集した。発見したのは午後6時頃で、夕方に飛び回るミドリツジミという蝶を観察にいった帰りだった。場所は、尾根と尾根の間に出来た水田の、畦の斜面だった。日当りのよい南向きの斜面で、地表から30cmの高さで生えている草の上に、脚を大きく広げてまったく動かず、餌のくるのを待っているようだった。新治町は都市近郊としては自然度も高く、動植物ともに豊富であり、緑の保全運動も活発であるため、この他にも生息している可能性が高いと思う。

7月8日から8月12日までの間、神奈川県平塚市上吉沢で、トビジロイソウロウグモ *Argyrodes cylindratus* Thoreel ♂♀を数頭確認した。場所は、スギアズマネザサ群落の林縁部で地上から3~1.5mのところに多かった。他のクモに居候している様子はなく、単独で枝から枝に糸をひき吊り下がっていた。近くにはコシロカネグモの円網やオナガグモの条網があったがかなり離れていた。また上吉沢の観察では♀を発見すると、その直径3m位の範囲内に♂のいる確率が高かったのがおもしろかった。

8月12日には上吉沢で、スズミグモ *Cyrtophora moluccensis* ♀を3頭確認し、1頭採集した。発見場所は日当りのいい斜面地につくられたミカン畠であった。このミカン畠は、ジョロウグモの絶好の生息地となっており、その中でひとときわ目立つドーム状の網が印象的だった。スズミグモは平塚で以前にも採集されてはいるが、分布の北限にちかく、なかなか見られない種である。しかし今後の調査によって、かなり分布も広がっていくと思われる。

— DRAGLINE —

シリアゲムシによるクモの餌の強奪

新 海 明

シリアゲムシは腐食者として知られているが、造網性クモの網から餌を盗みだすこともある
(Thornhill, 1975. Nature(258):709-711; 新海, 1988. 清澄(12):7-9)。

筆者は、1988年6月19日に千葉県君津市にある東京大学千葉演習林内の猪の川林道(C-3付近)において、シリアゲムシ *Panorpa japonica* (体長 16 mm) がシロカネグモ属の一種 *Leucauge* sp. (体長 8 mm) の幼体の網にかかった餌(ナミザトウムシの一種 *Nelima* sp.)を強奪するのを目撃した。発見したときは、すでにシリアゲムシは網上にいて餌のザトウムシを捕食中であった。クモは網の端の方に逃避しており、シリアゲムシが捕食しつづけている際に両者のあいだに餌をめぐる争いは見られなかった。

造網性クモ類の網にかかった餌資源を利用するものとしては、イソウロウグモ属 *Argyrodes* のクモが有名であるが、クモ以外にも、ここで紹介したシリアゲムシなどの長翅類、ハチドリなどの鳥類、ハチなどの膜翅類、チョウなどの鱗翅類などが知られており(新海, 1988. 同上), 今後さらに注意深く観察すればさらに多くの例が発見される可能性があろう。

また、ザトウムシの標本を見ていただいた鶴崎展巨氏によると、「野外でザトウムシが他の動物に食われているところをほとんど見たことがなく、シリアゲムシに、しかも盗み食いで、食われていたというのは興味深い」とのことであった。クモの餌としてのザトウムシについても注意してみると必要なようだ。

なお、標本の同定にあたっては薄葉重氏(シリアゲムシ), 鶴崎展巨氏(ザトウムシ)にお世話をになった。ここにお礼申し上げる。

スネグロオチバヒメグモの交接

稻 葉 茂 代

1988年6月14日, 小田原城内高等学校産のスネグロオチバヒメグモ♀成体の入っている管びんに♂を入れておいたところ、♀と♂が向かい合って互いの第1脚をあげていた(18:10)。管びんに♂を入れてから2, 3分後のことであった。

管びんを取り上げて、ルーペで見ると、♂が左の触肢で♀の右の外雌器をさするような、こするような動作をしていた。

1分もしないうちに今度は♂は右の触肢で♀の左の外雌器に同じ様な動作をした。♂の触肢は非常に長いので、♀の体を少し起ししただけで届く。

私が気づいてから、終了までの間、3分足らずの出来事であった。

終わって離れた後も、♂は第1脚を伸ばせば♀に届くあたりにじっとしていた。

18:44, ♂が少し動いて、♀に後ろを向けると、ほんの少し間をおいて、♀の方から♂に近寄っ

— DRAGLINE —

ていった。♀もすぐ♀の方を向く。

♀は♂の第1脚の下からもぐりこむようにして、♀♂ともに第1脚を持ち上げた。

♂はすぐに左の触肢を伸ばし、交換する。注意して見ると、触肢の先端を外雌器に差し込んではすぐ抜き、再び差し込んではすぐ抜くという動作をしていた。数回繰り返した。

1分もしないうちに右の触肢に変え、同じ動作をした。その間、使っていない触肢は♀の頭胸部の下で伸ばしている時もあったし、♀の頭胸部の上方に出ている時もあった。

(神奈川県立秦野高等学校) 1988. 6. 15 記

クスミサラグモの交尾時期

池田博明

1989年4月29日、城内高校山岳部の引率で神奈川県・丹沢の鳥尾山から大倉の方へ下山してきた時のことである。林道の枝先に網を張っているクスミサラグモが交尾をしているのに気がついた。15時であった。標高約400m、林道を100m位歩くと、8つの網のうち、雌雄同居で求愛の途中の組、移精中の組、網の下に雄がいて迷網の方に雌がいる組と、雌雄が3組も見られた。成体オスだけ、成体メスだけの網もあった。林道の他の場所でも観察した。移精の場所はすべて網の下面である。一方、雌雄同居の場合、オスはハンモック網の下面、メスは網の迷網部にいて餌を捕食していた。数頭採集ってきてクスミサラグモであることを確認した。

ムネグロサラグモの交尾行動については中平清(1975)の報告があるが、クスミサラグモの交尾行動についての報文はないようである。新海明氏によれば移精時間は大変に長いようである。メスが多回交尾であるとすれば、Austad(1983)のサラグモの行動研究の追試には、クスミサラグモが使えそうである。

さて、それから約1ヶ月した1989年5月20日、標高400mの西丹沢の大滝キャンプ場で周囲の灌木の枝先を調べたところ、クスミサラグモの成体メスだけの網が7例、雌雄同居が2組あり、成体オスだけの網はなかった。つまり、この時期ではオスはほとんど死んでしまっているのである。

実は成体オスだけの網が4個あったが、これはすべてムネグロサラグモのオスであった。ムネグロサラグモの成体メスだけの網も1個あった。ムネグロサラグモはクスミサラグモに、ほぼ一ヶ月遅れて成体になり、ひとまわり小さい。この時期には肉眼で十分識別できるほど、クスミとムネグロの大きさは異なる。これらもまた採集して顕微鏡で種を確認した。

ズグロオニグモのメスがオスを食べる

池田博明

1989年6月18日23時30分、神奈川県足柄上郡大井町の自宅の台所の窓の外で糸にぶら下がっているクモに妻が気がついた。呼ばれて行ってみると、ズグロオニグモのオスとメスである。交

— DRAGLINE —

尾かと思ったが、体勢が妙である。メスはメスの網のこしきから糸を引いて吊り下がっている。オスの体に糸がからまっている。よく見ると、メスはオスの腹部にかじりついていた。交尾の後でオスはメスに捕食されてしまったのだろうか。

神奈川県にまたいたスズミグモ

谷川明男

1989年9月15日、小田急線鶴巻温泉駅から弘法山へむかうハイキングコースにおいてスズミグモを発見した。このクモは雌の成体で、地上約1.5mのところに造網し、すでに卵のうを1個形成しており、腹部はかなりしほんでいた。そこで卵のうをそこに残し、親は採集してきた。また、そこからゆっくり歩いて20分くらいの林の中でも主のいないスズミグモの網を発見した。この網には卵のうは見られず、網はまだほとんど壊れてはいなかつたが木の葉や小枝がかなりかかっていました。しかし、網の上部ではチリイソウロウグモの雌が卵のうを2個つるして守っていた。

ジョロウグモの対ポルティア逃避行動

谷川明男

1989年8月24日、小野辰嗣氏、貞元己良氏と共に奄美大島の湯湾岳山麓において、ポルティアハエトリ（ケアシハエトリ）にねらわれたジョロウグモ（幼生）が逃避する場面を目撃した。

この場所はキムラグモ（アマミキムラグモ）の生息している所で、われわれもキムラグモを採集するためにここをおとずれた。あるていど採集をおこない、次のポイントに移動しようとしたときに、ポルティアハエトリがジョロウグモをねらっているのを小野氏が発見された。

発見時、ポルティアはジョロウグモの迷網の部分にじっとしており、ジョロウグモは主網の中心にいた。その時には、ポルティアがジョロウグモを襲う機会をじつとうかがい、ジョロウグモはまだポルティアの存在に気づいていないように思われた。われわれはポルティアがどのようにして襲いかかるかを観察しようとじっと見つめていたが、ふと、ジョロウグモがポルティアの方に動いた。ジョロウグモは自分とポルティアの間の糸をかみ切りはじめたのである。ジョロウグモもポルティアの存在をすでに認識していたようだ。この時両者はかなり接近しておりジョロウグモの肢はポルティアにとどかんばかりであった。数本の糸を切り終えたころだったろうか、突然、ポルティアがジョロウグモめがけて飛びかかったが、ジョロウグモは間一髪とびおりて逃げることができた。ポルティアはなおもその場にじっとしておりジョロウグモが登ってくるのを待っている様子であった。われわれもしばらくそのまま見ていたが、なかなかジョロウグモが登ってこないのでポルティアを採集し次のポイントに移動した。

襲いかかられたジョロウグモがとびおりて難をのがれようとするはある程度予想されたが、

— DRAGLINE —

それ以前に糸をかみきってなんとか事前にボルティアを落としてしまおうとするとは予想外のできごとであった。不必要的獲物を落とすのと違つてたいへんな危険を伴う作業だと思うのだが、どのような意味があるのだろうか。

箱根仙石原からヒメハナグモ

谷川明男

横浜国立大学植物生態学研究室の田中徳久氏から神奈川県西部の箱根仙石原産のヒメハナグモの標本をいただいた。田中氏によるとこのヒメハナグモの入手のいきさつは次のとおりである。

この研究室では1988年より箱根仙石原においてススキの刈り取り実験を行なっており、現地で刈り取ったススキを実験室に持ち帰っては乾燥重量を計測し生産量を測定している。今年（1989年）は9月21日に刈り取りが行なわれた。23日に同研究室の関口満氏と大竹浩恵氏が選別作業をしていてクモを発見された。田中氏は以前にも仙石原での野外調査の折、仲間が採集したヒメハナグモ（3-K-1985 松本幸子氏採集 新海栄一氏発表）を見ており、これはと思って持参されたのである。前回の標本は間近に産卵をひかえていた個体らしく腹部が大きくふくらんでいたが、今回の標本は産卵後と見て腹部は小さくなっている。

コアシダカグモの集まるトイレ

熊田憲一

1989年9月3日、横浜市緑区寺山町にある市民の森の一つ“四季の森”で、林の中の広場に設けてあるトイレに入ったところ、入口天井付近に40cmほどの柵網状のシート網様のものを見つけた。その中に大型のクモが数頭入っているのが見えた。木の枝を持ってきて追い出したところ、クモはコアシダカグモであった。天井は3mほど高さがあったため、網の状態の確認は出来なかつたが、15頭のコアシダカグモが入っていることがわかつた。

コアシダカグモが造網して集団生活をしているかに見え、驚いた。

その後、9月10日谷川明男さんと車でキャタツを持ち込み、網を確認したところ、クサグモの脱皮殻があり、網自体はクサグモのものであることが分かつた。この日は網の中に4頭のコアシダカグモがいた。さらに谷川さんと共にトイレの中や回りを調べたところ、全部で25頭のコアシダカグモを数えることが出来た。トイレの外周は一面塗りの壁ではなく、一部竹矢来風の模様で出来ている。コアシダカグモはそういった模様の隙間や、ひさしの隅に点在していた。

25頭ものコアシダカグモを一箇所でみたのは初めてであった。トイレ周囲は雑木林であり、そこから夜間照明に集まる虫などを採るために集まってきた結果であろうと推測している。

西表島のクモ類採集記録 I

谷 川 明 男*

Spiders from Iriomotejima-Island I

Akio Tanikawa*

はじめに

1983年3月より、機会あるごとに沖縄県の西表島（いりおもてじま）を訪れ、クモ類の観察・採集を続けている。西表島は、イリオモテヤマネコの生息地として世界的に有名であるが、東洋区と旧北区の境に位置することからもうかがえるように、たくさんの大変ユニークな生物が生息している。クモ類についても非常に興味深いものが多く、1989年4月までに採集した260種以上のクモ類の中で、種名を明らかにできたものは半数にも満たない。残りの不明種のうちの大部分は日本新記録種か新種であると思われるが、それらについては今後の課題とし、ここでは、筆者の西表島クモ類調査の第一報として、1989年7月までに種名を明らかにできた104種の種名と採集データを報告する。

西表島のクモ類についてのまとめた報告としては、大井（1963），大利・樋山（1976），下謝名（1966, 1967），八木沼（1964）などがあるが、これらのほか大熊（1976），Okuma（1988a, 1988b, 1988c），Ono（1978, 1984, 1988），Shimojana（1977, 1982, 1989），Tanaka（1988），田中（1989），八木沼（1970），Yoshida（1979, 1986, 1987a），吉田（1987b）などの報文中にも記録がある。しかしながら、これらの記録のうち、特に古いもののなかには、同定に疑問の有るもののが含まれており、全てを確実なものとして扱うことはできない。また、それぞれの研究者の手元にも発表に至らなかった不明種がかなりたくさん残っているものと思う。最近の研究成果によって少しずつ明らかにされつつあるとはいいうものの、現時点では未解決のものがあまりにも多い状態にある。本報告であつかった種のなかにも、疑問の残るものや、将来種名が変更されるであろうものが含まれているが、それらについては、それぞれの種名のあとにコメントを入れておく。

なお、本論に先立ち、一部種名の同定についてご教示いただいた、松本誠治氏、西川喜朗氏、小野展嗣博士、大熊千代子博士、田中穂積博士、八木沼健夫博士、吉田哉氏、文献入手のお世話をいただいた田中徳久氏、比較検討のための標本を貸与してくださった熊田憲一氏に厚くお礼申し上げる。

調査地の概要

西表島は、沖縄県の南西端、北緯 $24^{\circ}15'$ ～ $25'$ ・東経 $123^{\circ}40'$ ～ $55'$ に位置し、石垣島、竹富島などとともに八重山群島に属しており（図1），面積は約 290km^2 で、沖縄県内では沖縄島につ

*神奈川県立野庭高等学校(〒233 横浜市港南区野庭町1660)

いで二番目に大きい。島のほとんどは森林におおわれた山地で、標高470mの古見岳（こみだけ）を最高峰として、標高420m以上の山々が連なっている。これらに源を発し、多くの川が流れているが、なかでも北西部の浦内川は沖縄県最大の河川であり、南東部の仲間川、西部の越良川（くいらがわ）、仲良川（ながらがわ）などがこれに続く（図1）。

西表島測候所の資料（統計期間1955～1980；白井・佐野、1983による）によれば、年平均気温は23.4℃、7月の平均気温は28.4℃、1月の平均気温は17.5℃、年間降水量は2406.7mmである。

山地の森林はオキナワジイやオキナワウラジロガシなどからなる照葉樹林で、ヒカゲヘゴなどの木生シダや、ツルアダン、ハブカズラなどのつる植物、オオタニワタリなどの着生植物が多く見られ、熱帯的な色彩を帶びている。また、河川の下流部にはヤエヤマヒルギ、オヒルギ、メヒルギなどからなるマングローブ林が発達し、その後方はサキシマスオウ、アダンなどからなる湿地林となり、山地へとつながっている。わずかにある平地は、水田、サトウキビ畑、牧場などとして使われており、なだらかな丘陵地にはパイナップル畑が見られるが、人口が少ないので集落は小規模なもののが散在する程度である。

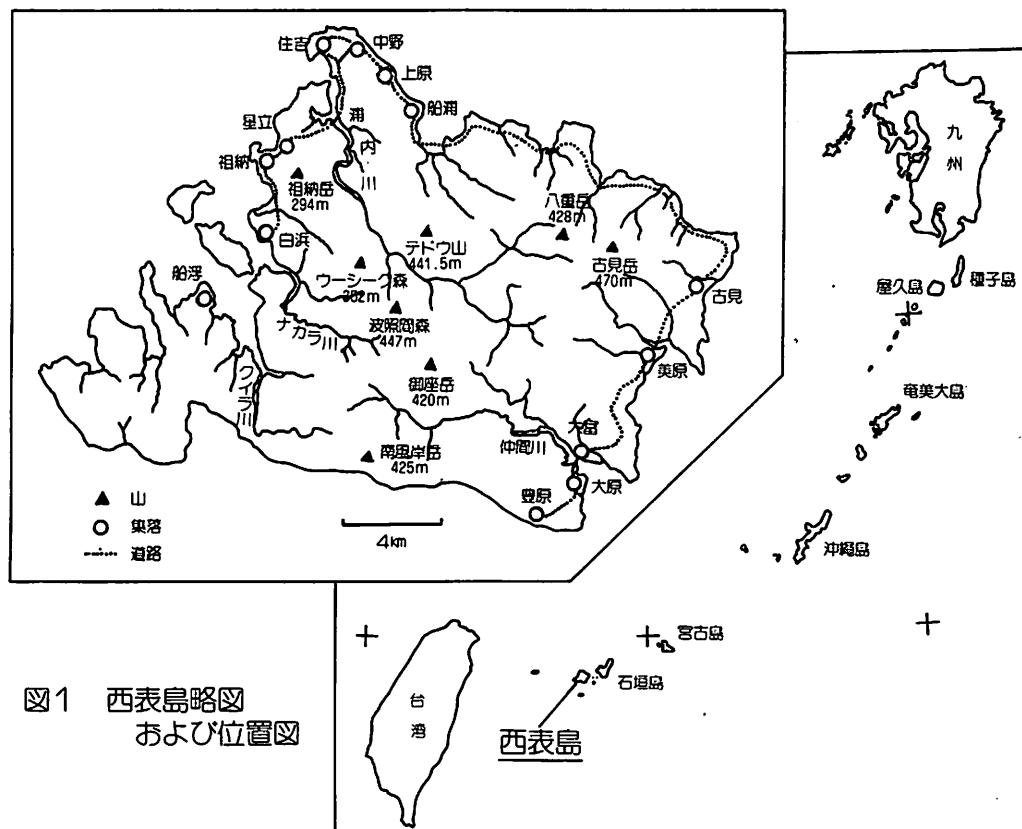


図1 西表島略図
および位置図

調査法の概要

調査は、主に水田などの耕作地の周囲、牧場の周囲などの草原、山地周辺の森林、海岸林、鍾乳洞などにおいて、ハンドソーティング、ビーティング、スィーピング、シフティング、ピットホールトラッピングによって行なっている。調査時期は、今までのところ12月下旬から1月上旬、3月下旬から4月上旬、5月上旬、7月下旬から8月下旬までの間である。

目 錄

科の配列は、八木沼(1986)に従い、科内での種の配列は学名のアルファベット順とした。同定者は特に記していないものは筆者である。採集日については西暦の19を省略して年・月・日にそれぞれ2ケタずつをあて6ケタで表記し、雌成体は♀、雄成体は♂、幼体はyで表し、個体数は省略した。なお、Bosenberg et StrandについてはBos. et Str.と略記した。

キムラグモ科

1. *Heptathera nishihirai* Haupt, 1979 オキナワキムラグモ
830330♀, 840501y, 861231y, 870101♀y, 881228♀.

トタテグモ科

2. *Latouchia swinhonis* Pocock, 1901 オキナワトタテグモ

オキナワトタテグモはキシノウエトタテグモときわめて類似しており、大きさ以外にこれといった区別点は見いだされておらず、両者の関係については精査が必要である。西表島において採集したものは体長においても、本州産のキシノウエトタテグモと大きな違いはないことから、オキナワトタテグモとするには無理があるかもしないが、両者の分布域を考えて、あえてオキナワトタテグモと同定した。キシノウエトタテグモとオキナワトタテグモおよび西表島産の種の関係については今後の課題である。なお、オクムラトタテグモはオキナワトタテグモのシノニムとされている。

- 830401♀, 840501♀y, 861231♀, 890402♀.

3. *Um mi dia fragaria* (Dömitz, 1887) キノボリトタテグモ

南西諸島産のキノボリトタゲモが本州産のものと同一種であるか否かについては検討の余地がある。

890401♀.

ショウゴクモ科

ジョウゴグモ科については下記の他に1種、種名不明のものが採集されている。

4. *Macrothele holsti* Pocock, 1901 ホルストジョウゴグモ

本種については、以前より *M. holsti* にはあたらないといわれてきているが、現在もまだ未解決のままである。

830331y, 830401y, 830402y, 850330y, 850331y,
870327y, 890401♀.

ガケシグモ科

5. *Pandava laminata* (Thorell, 1878) ネッタイガケシグモ
西川喜朗氏同定.
850329y, 850401y, 860103y, 870331♀, 870817♀.

ハグモ科

ハグモ科については、4種採集されているがいずれも種名不明である。

ウズグモ科

ウズグモ科については下記の他に2種、種名不明のものが採集されている。

6. *Miagrammopes oblongus* Yoshida, 1982 ミドリマネキグモ
吉田 勝氏同定.
830330♀, 850328♀, 850401♂♀, 850810♂♀, 850811♂♀,
850813♀, 860328♀, 860330♀, 870327♂, 870328♂,
870330♀, 870401♂, 870807♀, 870809♀, 870815♂,
870822♂♀, 880329♂, 880401♂, 880818♀, 890329♀,
890331♀.
7. *M. orientalis* Bois. et Str., 1906 マネキグモ
840430♀, 850327♀y, 850811♀, 870327♀, 870806♀,
870822♀, 870823♂, 880329♂.
8. *Uloborus yaeyamensis* (Yoshida, 1981) ヤエヤマウズグモ
830331♀, 830401♀, 840329♀, 840403♀, 840501♀,
850326♀, 850327♂♀, 850329♂♀, 850330♂♀, 850809♀,
850810♀, 850811♂♀, 850812♀, 850817♀, 860327♂♀,
860328♀, 860329♂♀, 860330♀, 870327♂, 870328♀,
870329♂, 870401♀, 870806♂♀, 870807♀, 870809♀,
870815♀, 870822♀, 880816♀, 880819♀, 881230♀,
890328♂, 890330♀, 890401♀.

タマゴグモ科

タマゴグモ科については、4種採集されているがいずれも種名不明である。

9. *Speocera laureata* Komatsu, 1974 カンムリグモ
 880103♂♀, 880104♀, 880328♀, 880329♀, 890101y,
 890327♂♀.

ジャバラグモ科

10. *Ablemma shimojanai* (Komatsu, 1968) ジャバラグモ
 890101♀, 890327♀.

ヤマシログモ科

11. *Scytodes fusca* Walckenaer, 1873 クロヤマシログモ
 850810♀, 850816♀, 850817♀, 850818♀, 860327♀,
 860329♀, 861230♀, 870401♀, 870820♀, 870822♀,
 870826♀, 880328♀, 880401♀, 880818♀, 880825♀.

ユウレイグモ科

ユウレイグモ科については下記の他に2種、種名不明のものが採集されている。

12. *Pholcus nagasakiensis* Strand, 1916 ミナミユウレイグモ
 830330♂♀, 840501♀, 850327♂♀, 850328♂, 850329♀,
 850331♀, 850810♀, 850811♀, 850817♂♀, 851228♀,
 860101♀, 860327♀, 861228♀, 870820♂, 880816♂♀.
 13. *Smeringopus pallidus* (Blackwall, 1858) ユウレイグモモドキ
 850814♂♀, 860328♂♀.

ヒメグモ科

ヒメグモ科については下記の他に25種、種名不明のものが採集されている。

14. *Achaeearanea culicivora* (Böös. et Str., 1906) カグヤヒメグモ
 861230♀.
 15. *A. japonica* (Böös. et Str., 1906) ヒメグモ
 830330♀, 840501♀, 840503♀, 850330♀, 850809♀,
 850812♀, 850813♀, 850814♀, 850817♀, 850820♀,
 851230♀, 861231♀, 870807♀, 870810♂♀, 870820♀,
 870824♀, 870826♀, 880329♀, 880816♀, 880825♀,
 881229♀, 890101♀.
 16. *A. tepidariorum* (C. Koch, 1841) オオヒメグモ
 830329♀, 830330♀, 830402♀, 840501♀, 840502♀,
 840503♀, 850327♀, 850328♀, 850329♀, 850330♂,

850401♀,	850712♀,	850811♀,	850813♀,	850819♀,
860101♀,	860328♀,	860329♂♀,	860330♂♀,	860331♂♀,
861229♀,	861230♀,	861231♀,	870327♂♀,	870328♂♀,
870329♀,	870331♂,	870401♂♀,	870806♂♀,	870809♀,
870810♀,	870820♂♀,	870822♂,	880328♂,	880329♂♀,
880330♂,	880401♂♀,	880816♀,	880819♂,	880825♀,
890328♂♀,	890329♂♀,	890331♂,	890401♀.	
17. <i>Anelosimus crassipes</i> (Börs. et Str., 1906)				アシプトヒメグモ
840502♀,	850330♂♀,	850401♀,	850811♀,	850816♀,
851227♀,	861228♂♀,	870327♀,	870329♀,	870330♀,
870331♀,	870401♀,	870807♀,	870824♀,	871228♂♀,
871231♀,	880328♀,	880401♂♀,	881231♂♀,	890329♂♀.
18. <i>A. exiguum</i> Yoshida, 1986				コアシプトヒメグモ
850330♂♀,	850401♂♀,	850811♂♀,	850816♀,	851228♀,
860101♂,	860102♂,	860329♀,	860330♂♀,	860401♂♀,
861228♀,	861229♂,	870104♂,	870327♂,	870329♂♀,
870330♂,	870401♂♀,	870806♀,	870807♀,	870823♂,
870824♂,	880103♀,	880328♂♀,	880401♂,	880824♀,
881229♂,	881231♂♀,	890101♂,	890102♂♀,	890328♂♀,
	890329♀.			
19. <i>Argyrodes bonadea</i> (Karsch, 1881)				シロカネイソウロウグモ
860329♂♀,	860401♂♀,	860402♀,	861228♂♀,	861231♀,
870327♂♀,	870808♂♀,	880104♀,	880401♂♀,	880815♂♀,
880824♂,	890327♂♀.			
20. <i>A. cylindratus</i> Thorell, 1889				トビジロイソウロウグモ
870807♀,	870809♀,	870810♂,	870820♀,	870823♀,
	880819♀.			
21. <i>A. cylindrogaster</i> (Simon, 1888)				オナガグモ
870327♀,	870330♀,	870807♀,	870809♀,	870810♀,
870820♀,	870821♀,	880331♂,	880815♀,	880818♀,
880819♀.				
22. <i>Chryso spiniventris</i> (O.P. Cambridge, 1869)				アシナガヒメグモ
861228♂,	861230♂♀,	870327♂,	880103♂,	880330♀,
880401♂♀,	880819♀,	880824♀,	881230♂,	881231♀.
23. <i>Coleosoma blandum</i> O.P. Cambridge, 1882				サヤヒメグモ
860329♀,	861228♂♀,	861230♀,	870327♂,	870329♂♀,

870401♂♀,	871229♂♀,	880103♀,	880328♂♀,	880331♀,
880401♂♀,	880819♀,	880825♀,	881231♀,	890102♀,
890103♂,	890329♀.			
24. <i>Dipoena mustelina</i> (Simon, 1888)			カニミジングモ	
850810♀,	850811♂♀,	860331♂♀,	860401♂♀,	870101♀,
870327♂,	870328♀,	870809♂,	870815♀,	870820♀,
880104♀,	880819♀,	881230♂,	890102♂,	890328♂.
25. <i>Episinus affinis</i> Bö. et Str., 1906			ヒシガタグモ	
850330♀,	870327♂♀,	870806♀,	870823♀,	890101♂,
890328♀,	890331♂.			
26. <i>Phoroncidia ryukyuensis</i> Yoshida, 1979			リュウキュウツクネグモ	
850328♂♀,	850330♀,	850401♀,	850811♀,	851229♀,
851230♂♀,	860101♀,	860102♀,	860329♀,	860330♂,
860401♀,	861228♂♀,	861229♀,	861230♂,	870101♀,
870327♂♀,	870328♂,	870329♂,	870330♀,	870806♂♀,
870807♀,	870820♀,	870823♀,	870824♀,	871228♂,
880103♀,	880104♀,	880328♀,	880330♂♀,	880331♂,
880401♂♀,	881231♀,	890101♀,	890328♀,	890329♀,
890330♀.				
27. <i>Steatoda cavernicola</i> (Bö. et Str., 1906)			ハンゲツオスナキグモ	
850331♀,	851230♀,	881229♀,	881230♂,	890329♀.
28. <i>S. erigoniformis</i> (O. P. Cambridge, 1872)			ナナホシヒメグモ	
860103♂,	871228♂♀,	881230♀.		
29. <i>Theridion adamsoni</i> Berland, 1934			サトヒメグモ	
870809♀,	880818♀,	890101♂,	890327♀.	
30. <i>Pholcomma nigromaculatum</i> Yoshida, 1987			クロボシカブトヒメグモ	
吉田 謹氏同定.				
850811♂,	851229♀,	860328♀,	861228♀,	861229♂,
861230♂,	861231♀,	870401♀,	870820♀,	870822♀,
871229♀,	880818♂,	890328♂.		

サラグモ科

サラグモ科については、23種採集されているがいずれも種名不明である。

センショウグモ科

センショウグモ科については、2種採集されているがいずれも種名不明である。

カラカラグモ科

カラカラグモ科については、3種採集されているがいずれも種名不明である。

ヨリメグモ科

31. *Conoculus lygadinus* Komatsu, 1940 ヨリメグモ
850331♀, 890104♂♀.

コツブグモ科

コツブグモ科については、1種採集されているが種名不明である。

コガネグモ科

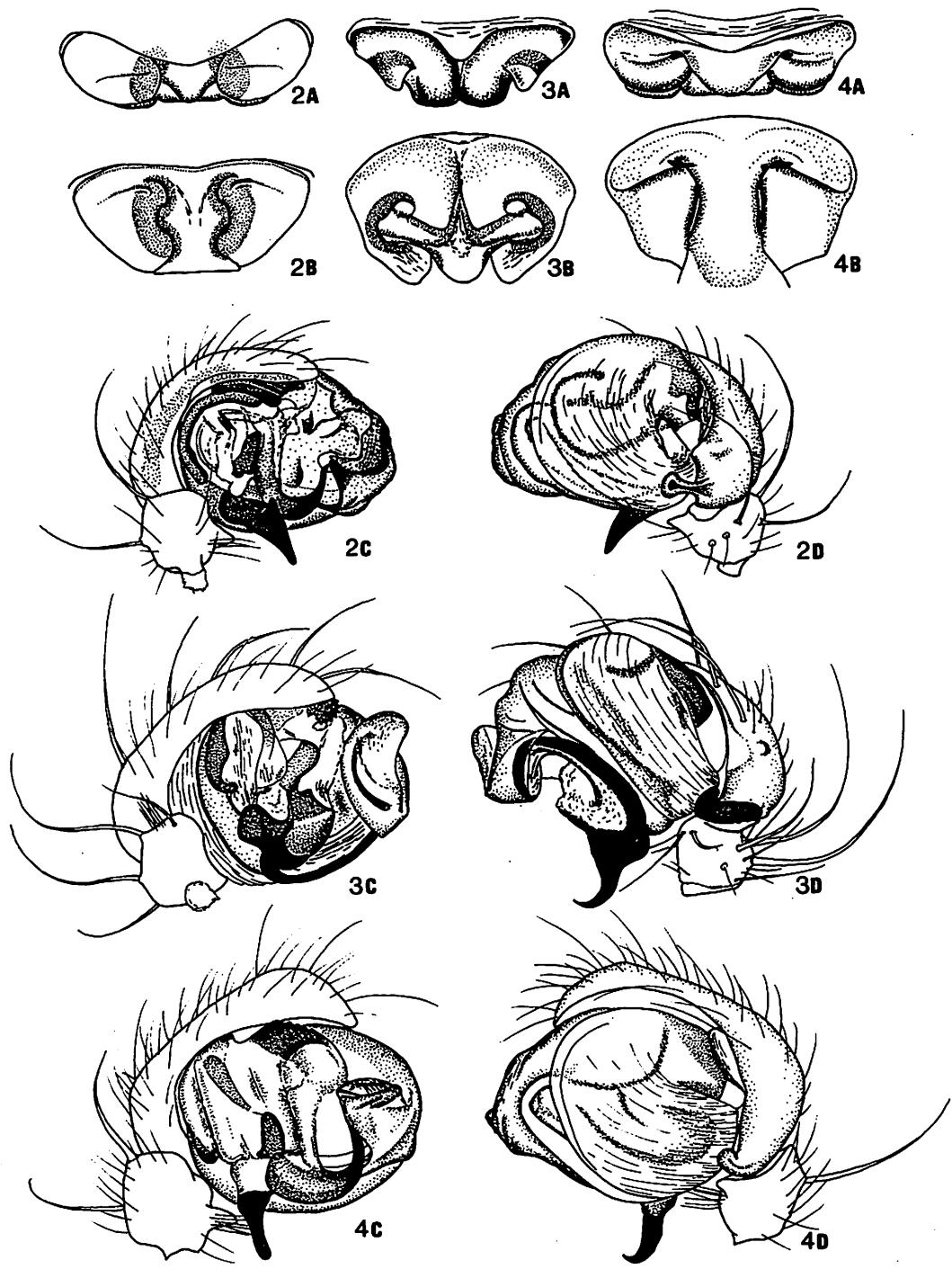
コガネグモ科については下記の他に14種、種名不明のものが採集されている。

32. *Acusilas coccineus* Simon, 1895 ハツリグモ
840501♀, 840503♀, 850812♀, 870331♀.
33. *Araneus punctigeta* (Doleschall, 1857) コゲチャオニグモ
850818♂, 860329♀, 861228♀♂.
34. *A. ventricosus* L. Koch, 1878 オニグモ
840502y.
35. *Argiope aemula* (Walckenaer, 1873) ナガマルコガネグモ
830329♀, 830330♀, 840430♀, 840504♂, 860103♂,
860329♂, 861228♀, 870101♂♀, 870327♂♀, 870401♀,
870810♀, 870826♂, 880819♀.
36. *A. minuta* Karsch, 1879 コガタコガネグモ
850811♀, 850812♀, 850813♂♀, 850817♀, 870422♀,
870822♀.
37. *Cyclosa mulmeinensis* (Thorell, 1887) トゲゴミグモ
本種については、マルゴミグモ *C. vallata* と同種ではないかとの意見もあるが今だに未解決である。
850326♂♀, 860327♂♀, 860401♀, 861228♂, 861229♀,
861231♂♀, 870328♀, 880104♀, 880330♀, 880819♀,
890103♂♀, 890327♂♀, 890328♂, 890329♂♀.
38. *Cyrtarachne nagasakiensis* Strand, 1916 シロオビトリノフンドマシ
840502♀.
39. *Cyrtophora exanthematica* (Doleschall, 1859) キヌアミグモ

図2

850812♂, 850820♀, 870329♀, 870824♂♀, 880104♀,

	880328♂♀,	880331♀,	880401♂♀.	
40.	<i>C. moluccensis</i> (Doleschall, 1857)		スズミグモ	
	図3			
	850813♂,	850817♂,	870809♀,	870820♂♀,
	870823♀,	871228♀,	881230♀.	870821♂,
41.	<i>C. unicolor</i> (Doleschall, 1857)		ハラビロスズミグモ	
	図4			
	870809♂,	870810♀,	870820♂,	870822♂,
42.	<i>Gasteracantha mammosa</i> C. Koch, 1845		チブサトゲグモ	880819♀.
	830330♀,	830331♀,	830401♀,	840503♀,
	850811♀,	850812♂,	850813♀,	850814♀,
	851227♀,	851230♂,	860102♀,	870329♀,
	870401♂,	870809♀,	870823♀,	880330♀,
43.	<i>Hypsosinga pygmaea</i> (Sundevall, 1831)		ヨツボシショウジョウグモ	880824♂.
	861228♀,	870329♀.		
44.	<i>H. sanguinea</i> (C. Koch, 1845)		シロスジショウジョウグモ	
	850330♀,	850810♀.		
45.	<i>Neoscona mellotteei</i> (Simon, 1895)		ワキグロサツマノミダマシ	
	850812♀,	880816♀.		
46.	<i>N. scylla</i> (Karsch, 1879)		ヤマシロオニグモ	
	840502♀,	840503♀.		
47.	<i>N. subpullata</i> (Bö's. et Str., 1906)		ヘリジロオニグモ	
	830330♀,	830331♀,	850326♀,	850329♀,
	850401♀,	850809♀,	850810♀,	850820♂♀,
	851230♂♀,	860327♀,	860329♂♀,	860330♂,
	861228♀,	861230♂,	861231♀,	860401♀,
	870401♂,	870820♀,	871228♂♀,	870101♀,
	880329♂,	880825♂,	890329♀.	870328♀,
48.	<i>N. theisi</i> (Walckenaer, 1841)		ホシスジオニグモ	
	830329♀,	830330♀,	830331♂♀,	850326♀,
	850328♀,	850330♂♀,	850401♂,	850814♂,
	860329♂♀,	860401♀,	861228♂♀,	861231♂♀,
	871228♂♀,	880328♀,	880331♀,	870401♂,
49.	<i>Nephila maculata</i> (Fabricius, 1793)		オオジョロウグモ	880825♂♀.
	840431♂,	850809♂♀,	870807♂♀,	870822♂,
				880824♀.



50. *Poltys columnaris* Thorell, 1890

ツツゲホウグモ

図6

830401♀, 840503♀, 860329♀, 870327♀, 890102♀.

51. *P. illepidus* C. Koch, 1843

ゲホウグモ

図5

830401♀, 840430♀, 850401♀, 860401♂, 870810♂,
880329♀, 880330♀, 880401♂, 880816♂.

52. *Zilla astridae* (Strand, 1916)

サガオニグモ

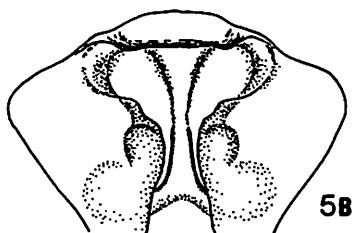
850328♀, 861227♀, 890330♀, 890401♀, 890402♀.



5A



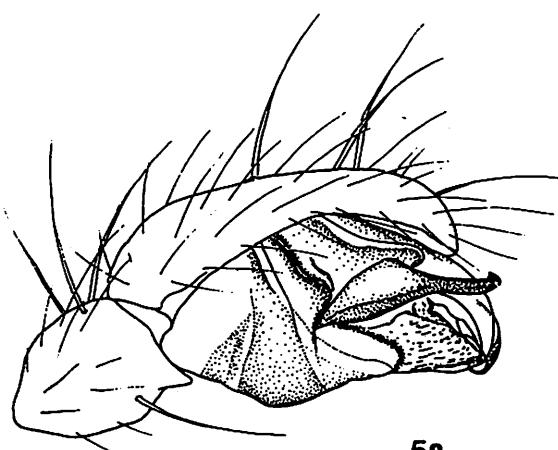
6A



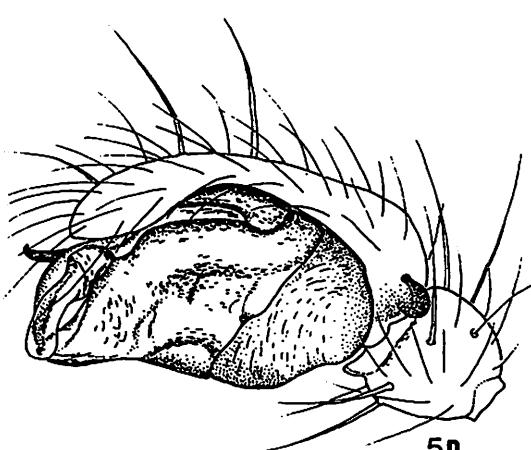
5B



6B



5C



5D

アシナガグモ科

アシナガグモ科については下記の他に4種、種名不明のものが採集されている。

53.	<i>Leucauge blanda</i> (L. Koch, 1878)		チュウガタシロカネグモ	
	830329♀, 850326♀, 850811♀, 850819♀, 860331♀, 870401♀,	830330♀, 850327♀, 850812♀, 851227♂♀, 870101♀, 870806♂♀,	830401♀, 850329♀, 850813♀, 860327♂♀, 870104♀, 870810♀,	830402♀, 850401♀, 850814♀, 860329♂♀, 870327♀, 870820♀,
	880331♂,	880401♂♀,	871229♂, 880824♀,	860330♀, 870821♂♀, 880330♀, 890328♂♀.
54.	<i>L. magnifica</i> Yaginuma, 1954		オオシロカネグモ	
	850817♀.			
55.	<i>L. subblanda</i> Böss. et Str., 1906		コシロカネグモ	
	840501♂, 850820♀, 870823♀,	850809♀, 870807♀, 880816♀.	850810♀, 870809♀,	850811♀, 870820♀, 870822♀,
56.	<i>Tetragnatha ceylonica</i> O.P. Cambridge, 1869	セイロンアシナガグモ		
	大熊千代子博士同定。			
	830331♂♀, 850327♀, 860103♀, 861228♂♀, 870104♂♀, 871229♀, 880331♀, 880824♀, 890329♂.	830401♀, 850330♂♀, 860105♀, 861229♂♀, 870809♀, 871231♀, 880401♂♀, 881228♀, 881229♀,	830402♀, 850401♀, 860329♂♀, 861230♂♀, 870810♀, 871227♀, 880102♀, 880815♀, 881230♂♀,	840430♀, 850809♀, 860401♂♀, 861231♂♀, 871010♀, 871228♂♀, 880328♀, 880816♂♀, 881231♀,
57.	<i>T. javana</i> Thorell, 1890		オナガアシナガグモ	
	850810♂, 870330♂♀, 880328♀, 890329♀.	861228♂♀, 870401♀, 880815♀,	861229♀, 870822♂, 880816♀,	861230♀, 870824♀, 880819♂♀, 861231♂♀, 871228♂♀, 880825♂♀,
58.	<i>T. mandibulata</i> Walckenaer, 1841		オオアシナガグモ	
	大熊千代子博士同定。			
	850330♂♀, 850810♀,	860103♂,	860331♀,	860401♂♀,

谷川明男, 西表島のクモ類採集記録 1 の報文中の図の説明がぬけています。下記ご参照ください。

図 1. 西表島略図および位置図

図 2-4. 2. *Cyrtophora exanthematica* キヌアミグモ 3. *C. moluccensis* スズミグモ
4. *C. unicolor* ハラビロスズミグモ A, B. 雌外雌器 C, D. 雄触肢

図 5-6. 5. *Poltys illepidus* ゲホウグモ 6. *P. columnaris* ツツゲホウグモ
A, B. 雌外雌器 C, D. 雄触肢

図 7-8. 7. *Hygropoda higenaga* ヒゲナガハシリグモ 8. *Perenethis unifasciata*
ミチミハヤテグモ A. 雌外雌器 B, C. 雄触肢

図 9. *Theleticopis severa* カマスクグモ A. 雌外雌器 B, C. 雄触肢

- | | | | | |
|---|-----------|-----------|--------------|-----------|
| 861228♂♀, | 861231♀, | 870101♀, | 871228♂♀, | 880816♂♀, |
| 880819♀, | 880825♂♀, | 881231♀, | 890329♂♀, | 890330♀. |
| 59. <i>T. maki harai</i> Okuma, 1977 | | | リュウキュウアシナガグモ | |
| 大熊千代子博士同定。 | | | | |
| 870815♂, | 880816♂. | | | |
| 60. <i>T. maxillosa</i> Thorell, 1895 | | | ヤサガタアシナガグモ | |
| 840402♀, | 870822♀, | 880819♂♀, | 880825♀, | 890331♂♀. |
| 61. <i>T. nitens</i> (Audouin, 1827) | | | ヒカリアシナガグモ | |
| 大熊千代子博士同定。 | | | | |
| 830401♂, | 861231♂♀, | 871228♂, | 880331♀. | |
| 62. <i>T. squamata</i> Karsch, 1879 | | | ウロコアシナガグモ | |
| 850330♂♀, | 860102♂, | 861228♂♀, | 861231♀, | 870401♂, |
| 880328♀, | 880329♂, | 890329♂. | | |
| 63. <i>T. tanigawai</i> Okuma, 1988 | | | タニガワアシナガグモ | |
| 大熊千代子博士同定。 | | | | |
| 850330♀, | 851229♂, | 860102♀, | 860328♀, | 860329♀, |
| 860330♀, | 860401♀, | 861228♂♀, | 861229♀, | 870104♀, |
| 870327♂♀, | 870328♀, | 870806♀, | 880329♂♀, | 880331♀, |
| 890328♂, | 890330♂, | 890401♂. | | |
| 64. <i>Tylorida striata</i> (Thorell, 1877) | | | キイロハラダカグモ | |
| 870101♀, | 870329♀, | 870824♀, | 880825♂♀. | |

ナガイボグモ科

ナガイボグモ科については、1種採集されているが種名不明である。

ホウシグモ科

ホウシグモ科については、2種採集されているがいずれも種名不明である。

タナグモ科

タナグモ科については下記の他に3種、種名不明のものが採集されている。

- | | | | |
|---|--|--|----------|
| 65. <i>Coelotes urumensis</i> Shimojana, 1989 | | | ウルマヤチグモ |
| 850101♂♀, 850331♀. | | | |
| 66. <i>C. yaeyamensis</i> Shimojana, 1982 | | | ヤエヤマヤチグモ |
| 850330♀, 860102♀. | | | |

ハタケグモ科

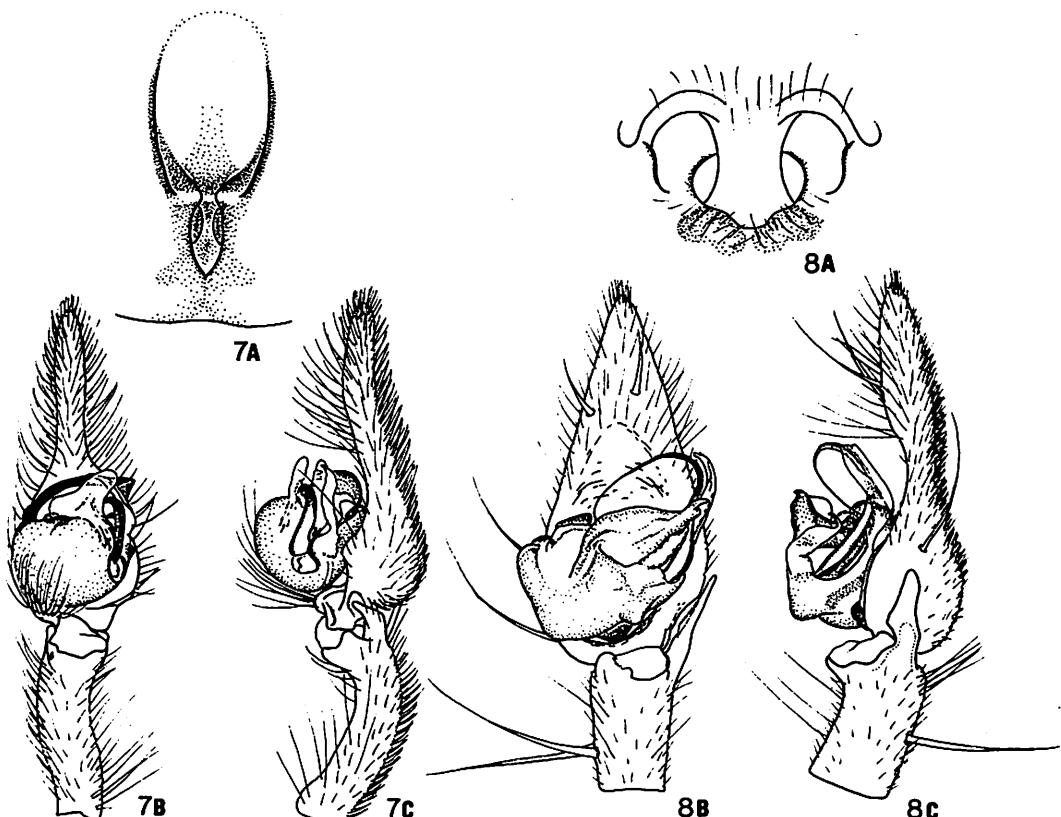
ハタケグモ科については、2種採集されているがいずれも種名不明である。

キシダグモ科

キシダグモ科については下記の他に1種、種名不明のものが採集されている。

y(♂)・y(♀)とは、幼体で採集し成体まで飼育したことを意味する。

67. *Dolomedes raptor* Bos. et Str., 1906 アオグロハシリグモ
850813♀, 870327y, 870401y(♂).
68. *Hygropoda higenaga* (Kishida, 1936) ヒゲナガハシリグモ
図7
850817♀, 880819♀, 880825♀, 890329y(♂).
69. *Perenethis unifasciata* Doleschall, 1859 ミナミハヤテグモ
八木沼健夫博士同定。
図8
861230y(♂♀), 870104y(♂).



コモリグモ科

コモリグモ科については下記の他に2種、種名不明のものが採集されている。

70. *Arctosa depectinata* (Böös. et Str., 1906) カガリビコモリグモ
860328♂, 890327♂.
71. *A. japonica* (Simon, 1888) ヒノマルコモリグモ
830331♂♀, 831227♀, 850328♂, 851230♀, 870328♂,
880329♂♀, 880331♀, 880822♀, 881229♂.
72. *Pardosa pseudoannulata* (Böös. et Str., 1906) キクツキコモリグモ
830329♂, 850814♀, 860103♂♀, 860327♀, 860329♂♀,
860330♂♀, 861230♂, 880104♂, 881230♂, 890103♂.
73. *P. takahashii* Saito, 1936 スナハラコモリグモ
田中穂積博士同定。
850401♂♀, 850809♂♀, 860329♂♀, 861229♀, 870328♀,
880104♂.
74. *Pirata clercki* (Böös. et Str., 1906) クラークコモリグモ
830330♀, 840503♀, 840504♀, 850328♀, 850329♂♀,
850401♀, 850812♂, 850813♂♀, 850817♂, 860103♀,
860328♂♀, 860330♂♀, 860331♂♀, 870327♀, 870810♂♀,
870823♂♀, 890329♂♀.
75. *P. meridionalis* Tanaka, 1974 ミナミコモリグモ
田中穂積博士同定。
861230♀.
76. *P. procurvus* (Böös. et Str., 1906) チビコモリグモ
田中穂積博士同定。
830331♂♀, 840502♂♀, 840503♀, 850329♀, 850330♂♀,
850401♂♀, 860328♂♀, 860401♂♀, 870331♂♀, 880329♂♀,
880330♂♀, 880824♂, 880825♂, 890327♀.
77. *Trochosa aquatica* Tanaka, 1985 ナガズキンコモリグモ
830330♂, 830331♀, 840505♀, 860103♂♀, 860327♂♀,
860328♀, 860329♂♀, 861230♀, 880819♀, 890103♂.

ササグモ科

ササグモ科については下記の他に1種、種名不明のものが採集されている。

78. *Oxyopes macilentus* L. Koch, 1878 シマササグモ
840503♀, 850327♂, 850810♀, 850811♂♀, 850812♀,
850813♀, 850816♀, 870807♀, 870810♂, 870813♀,

870815♀, 870822♀, 870824♀, 880328♂♀, 880815♀,
880818♂, 880824♂.

79. *O. sertatus* L. Koch, 1878 ササグモ
830329♂♀, 830330♀, 830402♂♀, 840430♀, 850326♂♀,
850327♀, 850329♀, 850330♂♀, 850401♂, 850811♂♀,
850812♀, 850818♀, 860327♀, 860329♂♀, 860330♂♀,
861228♀, 870327♂♀, 870401♂♀, 870821♀, 870824♀,
870826♂, 880328♂, 880329♂, 880331♀, 880401♂♀,
880815♂, 880818♀, 880819♀, 880825♂♀.

フクログモ科

フクログモ科については下記の他に 15 種、種名不明のものが採集されている。

80. *Chiracanthium eutittha* Böls. et Str., 1906 アシナガコマチグモ
840430♀, 890328♂.
81. *Clubiona jucunda* (Karsch, 1879) ヤハズフクログモ
890329♂.
82. *Itatsina praticola* (Böls. et Str., 1906) イタチグモ
850813♀, 880103♀.
83. *Orthobulba crucifera* Böls. et Str., 1906 オトヒメグモ
860329♀, 861230♀.
84. *Humua takeuchii* Ono, 1987 ヒメバチグモ
850810♀.

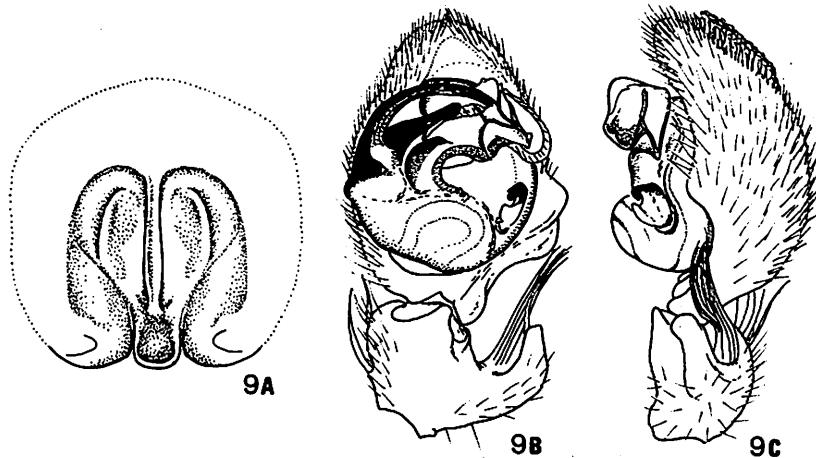
シボグモ科

シボグモ科については、2 種採集されているがいずれも種名不明である。

アシダカグモ科

アシダカグモ科については下記の他に 2 種、種名不明のものが採集されている。

85. *Heteropoda venatoria* (Linnaeus, 1758) アシダカグモ
850819♀, 860327♂, 870809♂, 880816♀.
86. *Thelecticopis severa* (L. Koch, 1875) カマスグモ
図 9
830401♂, 860331♀, 861228♂, 870806♂.



ワシグモ科

ワシグモ科については、4種採集されているがいずれも種名不明である。

カニグモ科

カニグモ科については下記の他に3種、種名不明のものが採集されている。

87. *Phrynarachne ceylonica* (O.P. Cambridge, 1884) ヘリジロツケオグモ

小野展嗣博士同定。

830330♀,	850331♂,	851227♀,	870327♀,	870820♂,
870821♀,	870822♂♀.			

88. *Boliscus tuberculatus* (Simon, 1886) イボカニグモ
- | | | | | |
|-----------|------------|-----------|-----------|-----------|
| 850330♀y, | 850810♂♀, | 850811♀, | 850813♀, | 850816♂, |
| 850817♂, | 850819♀, | 860102♂, | 860329♂, | 860330♂♀, |
| 860331♀, | 860401♂♀y, | 861228♀, | 870101♀, | 870327♀, |
| 870806♂, | 870807♀, | 870809♂♀, | 870820♂♀, | 870821♀, |
| 870823♂♀, | 870824♂, | 871231♂, | 880103♀, | 880104♀, |
| 880330♂, | 880401♂, | 880818♂♀, | 880819♂, | 880824♂♀, |
| 880825♀, | 890101♂♀, | 890328♀. | | |

89. *Lysiteles miniatus* Ono, 1980 ダイダイエビスグモ

小野展嗣博士同定。

860329♂,	860330♂♀,	860331♂♀,	860410♂,	870327♀,
890328♂,	890329♂,	890330♂,	890331♂.	

90. *Misumenops japonicus* (Bois. et Str., 1906) コハナグモ

840501♀,	850328♂,	850330♀,	850401♀,	850811♀,
850816♂,	851230♂,	860329♂♀,	860401♀y,	861229♂♀,

	870101♀,	870327♂♀,	870330♀,	870806♀,	870807♂♀,
	880329♂♀,	880330♀,	880401♂,	880825♀,	881231♂.
91.	<i>M. kumadai</i> Ono, 1985			クマダハナグモ	
	850330♀,	851230♀,	860102♀,	870101♀,	870820♂,
	871228♂,	871229♀,	880103♀,	880104♂.	
92.	<i>M. tricuspidatus</i> (Fabricius, 1775)			ハナグモ	
	850330♂♀,	860329♂♀,	861228♂♀,	861231♂♀,	870401♂,
	880328♂,	881231♀.			
93.	<i>Oxytate hoshizuna</i> Ono, 1978			ホシズナワカバグモ	
	840501♂,	850326♀,	850328♂,	850330♂♀,	850401♀,
	860328♂,	860331♂♀,	860401♀,	870327♀,	870328♂♀,
	870330♂,	870401♀,	880328♀,	880330♀,	880401♂♀,
	890328♂♀,	890329♀,	890330♀.		
94.	<i>Runcinia albostriata</i> Bos. et Str., 1906			シロスジグモ	
	850326♀,	850810♂♀,	850819♂,	860103♀,	860327♂,
	860329♀,	861228♂,	861230♂,	861231♀,	870104♂♀,
	870329♀,	870401♂,	870817♀,	870824♂,	880401♀,
	880819♀,	880825♂♀,	890328♀.		
95.	<i>Takachihoa truciformis</i> (Bos. et Str., 1906)	コキハダカニグモ			
	850326♂♀y,	850810♂,	850818♀,	860329♂♀y,	860330♂♀y,
	870329♀,	870824♀,	880331♀,	881231♀.	
96.	<i>Thomisus kitamurai</i> Nakatsudi, 1934			アマミアズチグモ	
	小野展嗣博士同定.				
	840503♂,	861228♀,	870328♂,	870807♂,	870815♂,
	881229♀.				
97.	<i>T. okinawaensis</i> Strand, 1907			オキナワアズチグモ	
	小野展嗣博士同定.				
	850330♂,	850816♂y,	860329♀,	880825♀,	861228♀,
	880815♀,	880824♂,	880825♂♀.		
98.	<i>Xysticus ephippiatus</i> Simon, 1880			シナカニグモ	
	850326♂,	860329♀,	870104♀,	870401♀,	880328♀.

エビグモ科

エビグモ科については、5種採集されているがいずれも種名不明である。

ハエトリグモ科

ハエトリグモ科については下記の他に32種、種名不明のものが採集されている。

99.	<i>Hasarius adansonii</i> (Audouin, 1827)		アダンソンハエトリ	
	830329♀,	830330♀,	840430♂,	850328♀,
	850820♀,	851227♀,	860103♂,	860328♀,
	870328♂,	870805♂♀,	870807♂,	870809♂,
	880330♂,	880811♂♀,		871229♂,
100.	<i>Marpissa elongata</i> (Karsch, 1879)		ヤハズハエトリ	
	840502♂♀,	850811♂♀,	850819♂♀,	860103♂y,
	860401♂,	861220♂y,	861228♂♀,	861231♂♀,
	870401♂♀,	870805♂,	870807♀,	870824♂♀,
	871227♀,	871228♂,	871229♂♀,	870826♀,
	880401♂,	880815♀,	880824♂,	880328♂♀,
	890102♂,	890329♀.		880331♀,
101.	<i>Menemerus bivittatus</i> (Dufour, 1831)		アゴグロハエトリ	
	850810♀,	880402♂.		
102.	<i>M. confusus</i> Böss. et Str., 1906		シラヒゲハエトリ	
	850330♂,	890331♂♀.		
103.	<i>Plexippus paykulli</i> (Audouin, 1827)		チャスジハエトリ	
	830331♀,	850401♂♀y,	850812♀,	850814♀,
	870401♀,	870821♂,	871229♂,	861230♂,
	890331♂♀.			880104♀,
104.	<i>Portia fimbriata</i> (Doleschall, 1859)		ケアシハエトリ	
	松本誠治氏同定。			
	830330♂,	850329♂♀,	860328♀,	870806♂,
				880815♀.

引 用 文 献

大井良次, 1963. 沖縄本島・西表島のクモ. *Atypus*, (29):15-17.

大熊千代子, 1976. 日本のクモの新記録 *Tetragnatha ceylonica* Cambridge セイロ
ンアシナガグモ. *Atypus*, (67):45-47.

Okuma, C., 1988a. Five new species of *Tetragnatha* from Asia (Araneae:
Tetragnatidae). *Esakia*, (26):71-77.

_____, 1988b. A revision of the genus *Tetragnatha* Latreille (Araneae:
Tetragnatidae) of Asia, Part I. *J. Fac. Agr., Kyusyu Univ.*, 32:165-181.

_____, 1988c. A revision of the genus *Tetragnatha* Latreille (Araneae:
Tetragnatidae) of Asia, Part II. *J. Fac. Agr., Kyusyu Univ.*, 32:183-213.

- Ono, H., 1978. Thomisidae aus Japan II. Das Genus *Oxytate* L. Koch 1878 (Arachnida: Araneae). *Senckenbergiana Biol.*, 58:245–251.
- _____, 1984. The Thomisidae of Japan. N. *Boliscus* Thorell, 1981 (Arachnida: Araneae), a genus new to the Japanese fauna. *Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo*, 10:63–71.
- _____, 1988. A revisional study of the spider family Thomisidae (Arachnida: Araneae) of Japan. 252pp. National Sciense Musium, Tokyo.
- 大利昌久・樋山御理男, 1976. 先島諸島(八重山群島・宮古群島)の真正蜘蛛類相とその生息域. *Atypus*, (66):15–23.
- 下謝名松栄, 1966. 先島(石垣島・西表島)の真正蜘蛛類. *Atypus*, (41/42):24–36.
- _____, 1967. 琉球列島のクモ相について. *Biol. Mag. Okinawa*, 4:16–25.
- Shimojana, M., 1977. Preliminary report on the cave spider fauna of the Ryukyu Archipelago. *Acta Arachnol.*, 27:337–365.
- _____, 1982. A new species of the genus *Coelotes* (Araneae: Agelenidae) from the Yaeyama Islands, Okinawa Prefecture, Japan. *Acta Arachnol.*, 30:75–82.
- _____, 1989. Four new species of the genus *Coelotes* (Araneae: Agelenidae) from the Ryukyu Islands, Japan. *Arachnol. Pap. pres. Yaginuma, Osaka*, 75–82.
- 白井祥平・佐野芳康, 1983. 西表島の自然. 128pp. 新星図書出版, 那覇.
- Tanaka, H., 1988. Lycosid spiders of Japan. I. The genus *Pirata* Sundevall. *Acta Arachnol.*, 36:33–77.
- 田中穂積, 1989. 日本から得られた *Pardosa* (オオアシコモリグモ属) の2未記録種および1新シノニム. *Atypus*, (93):10–15.
- 八木沼健夫, 1964. 南西諸島のクモ. 南西諸島学術調査報告(自然科学編). 56pp. 関西自然文化研究会, 大阪.
- _____, 1970. 分布資料. *Atypus*, (54):27.
- _____, 1986. 原色日本クモ類図鑑. 305pp. 保育社, 大阪.
- Yoshida, H., 1979. Notes on the Japanese species of the genus *Phoroncidia* (Araneae: Theridiidae). *Acta Arachnol.*, 28:45–51.
- _____, 1986. The spider genus *Anelosimus* (Araneae: Theridiidae) in Japan and Taiwan. *Acta Arachnol.*, 34:31–39.
- _____, 1987. A new spider of the genus *Pholcomma* (Araneae: Theridiidae) from Taiwan and Japan. *Bull. Biogeogr. Soc. Japan*, 42:29–32.
- 吉田哉, 1987b. *Miagrammopes oblongus* Yoshida, 1982 日本に産する. *Atypus*, (90):13–14.

東京蜘蛛談話会 真鶴合宿報告（1988年7月30日～8月1日）

池田博明

1988年の合宿は神奈川県足柄下郡真鶴町にて実施した。真鶴町岩地区はムラクモヒシガタグモの群生地があったため、小田原城内高校生物部員と一緒によく調査に通ったところである。しかし、岩地区以外での調査は数少なかったため、談話会の合宿の企画は頗ってもないことであった。なお、本会誌で既に報告された真鶴関係のリストは新島の記録 (Matsumoto 1970, 6種), 真鶴岬 (権田 1972, 17種), 田中徳久氏採集品 (谷川 1989, 5種) の3篇である。

合宿の様子はKishidaia (57)号に貞元己良氏が書いている。今回の採集日程は以下の通りである。7月30日(土)15時半に真鶴駅に集合。16時からは“岩小学校付近”で採集、夕食後20時から宿舎「新栄荘」近くの“釈迦堂”にて夜間観察、クモ合わせの後に23時から岩地区の“横浜国大附属臨海実験所付近”でムラクモヒシガタグモの観察。7月31日(日)は9時から真鶴岬の“原生林”で観察、ケーブパレスで昼食後に“三つ石海岸から岬先端”で観察、夜間観察は“サボテンランド周辺”と“高浦海岸付近”，8月1日(月)は9時頃から“無線所跡付近”で採集した後、小田原市南町のスカイ・ラーキーで昼食。午後は神奈川県南足柄市大雄山にて観察・採集した。クモ合わせは採集地毎に行なった。

採集地のLocality Code (松本 1979) は岩小学校・横浜国大附属臨海実験所は[C3908-3509], 釈迦堂・無線所跡は[C3908-3508], 原生林・三つ石海岸・サボテンランド・高浦海岸は[C3909-3508] である。地図上に採集場所を示した(図1)。

合宿参加者は池田博明・板倉泰弘・稻葉茂代・小澤実樹・小野展嗣・日下部光代・熊田憲一・貞元己良・佐藤幸子・佐藤尚子・萩本房枝・古浜隆・本木洋子・池田泉・池田千洋の計15名。

本合宿に関連のある報文として熊田(1989)のムラクモヒシガタグモの性モザイクの発見(岩地区にて), 池田(1989)のキハダエビグモの瞬間的体色変化の発見(大雄山にて)がある。

同定は参加者が現地で行った他, その場ではっきりしない種については熊田憲一氏と小野展嗣氏, 池田が標本を持ち帰って確認した。同定結果をお寄せ下さった熊田, 小野両氏に感謝する。

目録の科の配列は八木沼(1986)に従い, 種の配列は学名のアルファベット順とした。成長段階を表す記号はF=メス成体, M=オス成体, f=メス幼体(現地では亜成体と判断したもの), m=オス幼体(現地では亜成体と判断したもの), e=卵のう, y=幼体である。

なお, 池田は亜成体という判定の危うさを認めながらも, このようなリストの亜成体という記録をそのままのみしての再利用はしないという条件つきで, 観察会などではこの便利な言葉の使用を認める立場をとりたい。池田は「似てない親子」(梅谷・加藤編 1989 所収)でも亜成体という用語について論じた。

採集確認地は各地区の頭文字一字で示した。

採集観察目録

1. <i>Ctenizidae</i> トタテグモ科				
1. <i>Latouchia typica</i>	キシノウエトタテグモ	fy	糸	
2. <i>Ummidia fragaria</i>	キノボリトタテグモ	視認のみ	原	
2. <i>Atypidae</i> ジグモ科				
3. <i>Atypus karschi</i>	ジグモ	FMy	糸・横・原	
3. <i>Amaurobiidae</i> ガケジグモ科				
4. <i>Titanoceia albofasciata</i>	ヤマトガケジグモ	My	三	
4. <i>Uloboridae</i> ウズグモ科				
5. <i>Hyptiotes affinis</i>	オウジグモ	y	原	
6. <i>Miagrammopes orientalis</i>	マネキグモ	y	岩	
7. <i>Uloborus sybotides</i>	カタハリウズグモ	Fey	原	
5. <i>Oecobiidae</i> チリグモ科				
8. <i>Oecobius annulipes</i>	チリグモ	f	糸	
6. <i>Segestriidae</i> エンマグモ科				
9. <i>Ariadna insulicola</i>	シマミヤグモ	fy	三	
10. <i>A. lateralis</i>	ミヤグモ	FfMy	糸	
7. <i>Scytodidae</i> ヤマシログモ科				
11. <i>Scytodes thoracica</i>	ユカタヤマシログモ	F	糸	
8. <i>Oonopidae</i> タマゴグモ科				
12. <i>Orchestina sanguinea</i>	アカハネグモ	F	糸	
9. <i>Pholcidae</i> ユウレイグモ科				
13. <i>Pholcus crypticolens</i>	ユウレイグモ	Fy	糸	
10. <i>Theridiidae</i> ヒメグモ科				
14. <i>Anelosimus crassipes</i>	アシブトヒメグモ	FMyfy	岩・糸・原・三・無	
15. <i>Achaeearanea angulithorax</i>	ツリガネヒメグモ	Ffme	原	
16. <i>A. japonica</i>	ヒメグモ	FfMy	糸・原・三・サ・無	
17. <i>A. tepidariorum</i>	オオヒメグモ	FMyey	全域	
18. <i>A. culcivora</i>	カグヤヒメグモ	M	原	
19. <i>Argyrodes cylindrogaster</i>	オナガグモ	Fey	糸・無	
20. <i>A. fissifrons</i>	チリイソウロウグモ	y	糸	
21. <i>A. fur</i>	フタオイソウロウグモ	F	原	
22. <i>A. saganus</i>	ヤリグモ	y	糸	
23. <i>Dipoena castrata</i>	ボカシミジングモ	FM	無	
24. <i>D. mustelina</i>	カニミジングモ	FMy	全域	
25. <i>D. okumae</i>	クロミジングモ	Fe	原	

真鶴半島

図では真鶴新道を省略した

3908

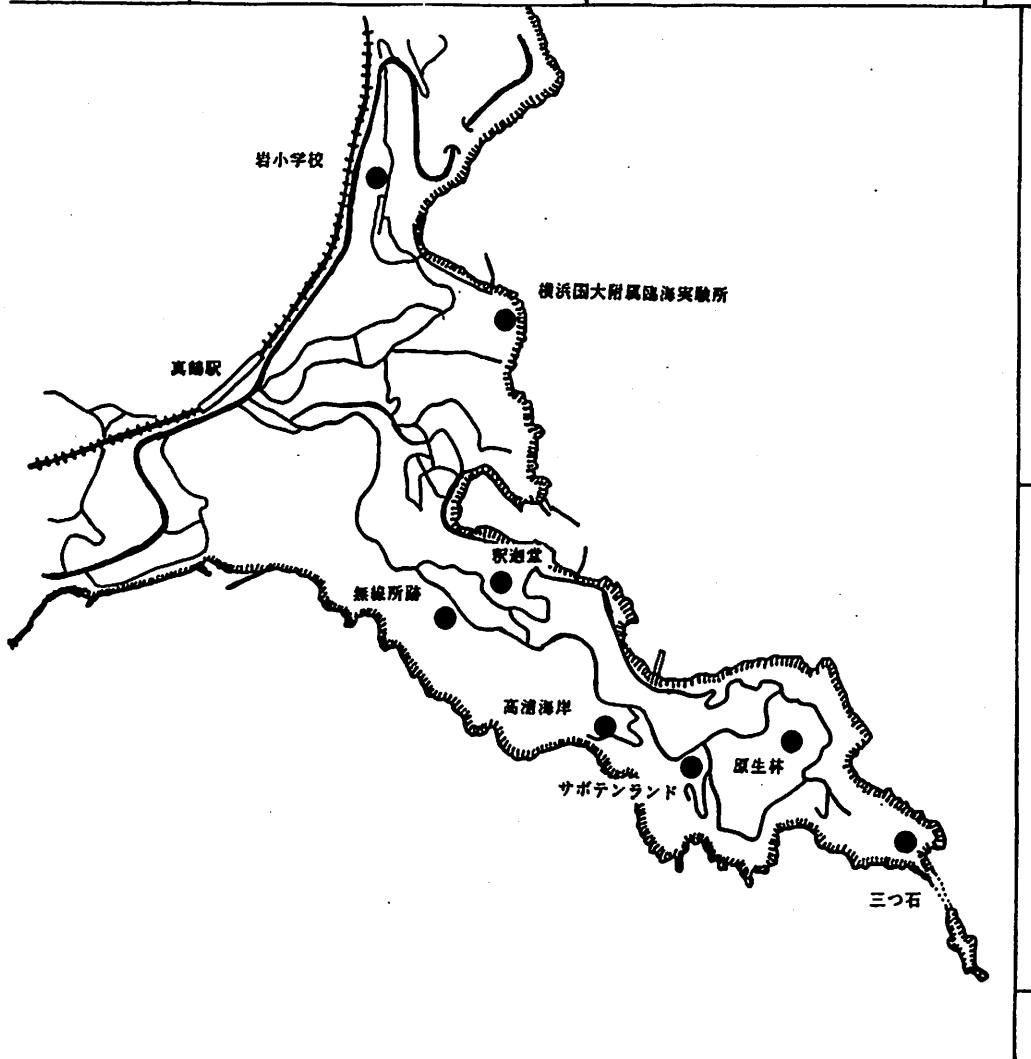
3909

3910

3510

3509

3508



26. <i>D. mutilata</i>	コアカクロミジングモ	F	积
27. <i>D. punctisparsa</i>	シモフリミジングモ	FM	积・無
28. <i>Enoplognatha japonica</i>	ヤマトコノハグモ	y	サ
29. <i>E. transversifoveata</i>	カレハヒメグモ	y	原
30. <i>Episinus affinis</i>	ヒシガタグモ	y	积・高
31. <i>E. nubilus</i>	ムラクモヒシガタグモ	FMy	横
32. <i>Stemmopes nipponicus</i>	スネグロオチバヒメグモ	y	原
33. <i>Theridion adamsoni</i>	サトヒメグモ	Fe	三
34. <i>T. sterninotatum</i>	ムナボシヒメグモ	FeMy	积・原
11. <i>Linyphiidae</i> サラグモ科			
35. <i>Arcuphanes tamaensis</i>	タマヤミサラグモ	FMm	原
36. <i>Bathyphantes tateyamaensis</i>	タテヤマテナガグモ	FM	岩
37. <i>Linyphia longipedella</i>	アシナガサラグモ	F	积
38. <i>L. oideadicata</i>	ヘリジロサラグモ	F	無
39. <i>Meioneta obliqua</i>	ナナメケシグモ	F	原
12. <i>Mimetidae</i> センショウグモ科			
40. <i>Ero japonica</i>	センショウグモ	FMe	积・原・三・サ・無
13. <i>Theridiosomatidae</i> カラカラグモ科			
41. <i>Ogulnius pullus</i>	ヤマジグモ	Fe	原
14. <i>Mysmenidae</i> コツブグモ科			
42. <i>Mysmenella jobi</i>	ナンブコツブグモ	Mey	原
15. <i>Araneidae</i> コガネグモ科			
43. <i>Acusilas coccineus</i>	ハツリグモ	Fy	岩・原
44. <i>Araneus abscissus</i>	キザハシオニグモ	f My	三・無
45. <i>A. ejusmodi</i>	ヌサオニグモ	F	岩
46. <i>A. mitificus</i>	ビジョオニグモ	y	岩
47. <i>A. pentagrammicus</i>	アオオニグモ	y	無
48. <i>A. punctigera</i>	コゲチャオニグモ	F	积
49. <i>A. semilunaris</i>	マルヅメオニグモ	F	岩・無
50. <i>A. ventricosus</i>	オニグモ	y	积
51. <i>Argiope amoena</i>	コガネグモ	F	無
52. <i>A. bruennichi</i>	ナガコガネグモ	f my	三・無
53. <i>A. minuta</i>	コガタコガネグモ	f my	岩・积・三・無
54. <i>Chorizopes nipponicus</i>	ヤマトカナエグモ	e	無
55. <i>Cyclosa argenteoalba</i>	ギンメッキゴミグモ	Ff Mmy	岩・原・三・サ
56. <i>C. sedeculata</i>	ヨツデゴミグモ	FeMy	岩・积・原・無

57. <i>C. octotuberculata</i>	ゴミグモ	Fey	三
58. <i>C. vallata</i>	マルゴミグモ	FfMm	三
59. <i>Nephilla clavata</i>	ジョロウグモ	y	全域
60. <i>Neoscona mellotteei</i>	ワキグロサツマノミダマシ	Ffmy	全域
61. <i>N. scylla</i>	ヤマシロオニグモ	FMy	积・原・無
62. <i>N. scylloides</i>	サツマノミダマシ	Fmy	积・無
63. <i>N. subpullata</i>	ヘリジロオニグモ	Ffy	岩・三
64. <i>Yaginumia sia</i>	ズグロオニグモ	FM	サ
16. <i>Tetragnathidae</i> アシナガグモ科			
65. <i>Leucauge blanda</i>	チュウガタシロカネグモ	Mfy	三
66. <i>L. magnifica</i>	オオシロカネグモ	Fy	岩・积・無
67. <i>L. subblanda</i>	コシロカネグモ	M	三
68. <i>L. subgemmea</i>	キララシロカネグモ	M	無
17. <i>Urocteidae</i> ヒラタグモ科			
69. <i>Uroctea compactilis</i>	ヒラタグモ	FMmy	积
18. <i>Agelenidae</i>			
70. <i>Agelena limbata</i>	クサグモ	Fy	岩・积・サ
71. <i>A. opulenta</i>	コクサグモ	fy	岩・积・三・無
72. <i>Coelotes insidiosus</i>	シモフリヤチグモ	f	积
73. <i>C. luctuosus</i>	メガネヤチグモ	m	岩
74. <i>Litiseles shirahamensis</i>	イソタナグモ	My	三
19. <i>Pisauridae</i> キシダグモ科			
75. <i>Dolomedes sulfreus</i>	イオウイロハシリグモ	FMmy	岩・积・原・三・無
20. <i>Lycosidae</i> コモリグモ科			
76. <i>Arctosa japonica</i>	ヒノマルコモリグモ	f	横
77. <i>Pardosa astrigera</i>	ウツキコモリグモ	FM	三
78. <i>P. laura</i>	ハリゲコモリグモ	Fe	無
79. <i>Pirata procurvus</i>	チビコモリグモ	FMe	岩・原
21. <i>Oxyopidae</i> ササグモ科			
80. <i>Oxyopes sertatus</i>	ササグモ	Fe	积・原・三・無
22. <i>Clubionidae</i> フクログモ科			
81. <i>Chiracanthium unicum</i>	ヤサコマチグモ	FMy	岩・無
82. <i>C. cutittha</i>	アシナガコマチグモ	F	高
83. <i>Clubiona vigil</i>	ムナカフクログモ	Fey	积・無
84. <i>Itatsina praticola</i>	イタチグモ	FMy	原
85. <i>Phrurolithus komurai</i>	コムラウラシマグモ	y	三

86. <i>P. pennatus</i>	ヤバネウラシマグモ	FMfy	岩・积・原・三・無
87. <i>P. sp..</i>	キレオビウラシマグモ；仮称	F	岩
23. <i>Ctenidae</i> シボグモ科			
88. <i>Anahita fauna</i>	シボグモ	f My	三を除く全域
24. <i>Heteropodidae</i> アシダカグモ科			
89. <i>Heteropoda forcipata</i>	コアシダカグモ	FMy	积・原・三・サ・高
90. <i>H. venatoria</i>	アシダカグモ	Fy	积
25. <i>Thomisidae</i> カニグモ科			
91. <i>Bassani ana decorata</i>	キハダカニグモ	Fy	岩・积・無
92. <i>Misumenops japonicus</i>	コハナグモ	Fey	高
93. <i>M. triscuspidatus</i>	ハナグモ	Fy	横・三
94. <i>Oxyptila nipponica</i>	ニッポンオチバカニグモ	F	原
95. <i>Oxytate striatipes</i>	ワカバグモ	Fy	岩
96. <i>Pistius undulatus</i>	ガザミグモ	y	积
97. <i>Thomisus labefactus</i>	アズチグモ	Ff My	岩・三・無
98. <i>Tmarus yaginumai</i>	ヤギヌマノセマルトラフカニグモ	FMy	岩・积・無
99. <i>Xysticus croceus</i>	ヤミイロカニグモ	F	原
100. <i>X. saganus</i>	オオヤミイロカニグモ	F	原
26. <i>Phiodromidae</i> エビグモ科			
101. <i>Philodromus subaureolus</i>	アサヒエビグモ	Fey	积・無
102. <i>P. spinitarsis</i>	キハダエビグモ	F	無
103. <i>Tibellus tenellus</i>	シャコグモ	y	岩・原・三・高・無
27. <i>Salticidae</i> ハエトリグモ科			
104. <i>Carrhotus xanthogramma</i>	ネコハエトリ	y	三
105. <i>Euophrys undulbtovittata</i>	イナズマハエトリ	Fy	三
106. <i>Evarcha albaria</i>	マミジロハエトリ	FMMy	岩・原・三・高・無
107. <i>Harmochirus brachiatus</i>	ウデブトハエトリ	y	原
108. <i>Helicius cylindrata</i>	コジャバラハエトリ	F	原
109. <i>Lauferia aenea</i>	エキスハエトリ	FMy	原・三
110. <i>Marpissa elongata</i>	ヤハズハエトリ	FM	三
111. <i>M. pulla</i>	ヨダンハエトリ	y	岩・三
112. <i>Myrmarachne formicaria</i>	タイリクアリグモ	Fy	三
113. <i>M. innermichelis</i>	ヤサアリグモ	Ffe	三・無
114. <i>M. japonica</i>	アリグモ	F	岩・無
115. <i>Menemerus himeshimensis</i>	イソハエトリ	FMMey	三
116. <i>M. confusus</i>	シラヒゲハエトリ	f	积

117. <i>Plexippoides doenitzi</i>	デニツツハエトリ	fy	原
118. <i>Plexippus paykulli</i>	チャスジハエトリ	FfMe	三・サ
119. <i>P. setipes</i>	ミスジハエトリ	Fmy	三・高
120. <i>Rhene atrata</i>	カラスハエトリ	FMey	岩・原・三
121. <i>R. sp.</i>	ヒメカラスハエトリ	FM	岩・原・無
122. <i>Silerella vittata</i>	アオオビハエトリ	FM	三
123. <i>Sitticus penicillatus</i>	シラホシコゲチャハエトリ	FM	三
124. <i>Yaginumanis sexdentatus</i>	ムツバハエトリ	M	原

以上確認された種は124種であった。目録について補足説明をしておく。なお特に断わりのない種の同定者は熊田憲一氏である。

この時期、ミヤグモのオスは夜間、壁面を徘徊していた。ジグモの成体は大抵雌雄同居していた。

クロミジングモは原生林で採れた。雌はキベリミジングモと酷似するが、「第4脚腿節末端に黒環がない」「雌ではキベリミジングモに誤って同定された場合もあると思われる」(吉田 1988)。

他の地域の合宿では恒例のアシナガグモ属とトリノフンドマシ類が1頭も採れなかったのが真鶴の目だった特徴である。しかし、トリノフンドマシ類は数は多くないが、皆無ではないと推定している。池田は真鶴中学校でアカイロトリノフンドマシを観察・撮影したことがある。アシナガグモ属も幼体が採集された記録がある。

ヤギヌマノセマルトラフカニグモは無線所跡でメス成体が(小野同定)，岩小学校・积迦堂付近でオス成体が採集された。無線所跡のメス成体の腹部背面には鮮やかな色彩があった。セマルトラフカニグモは岩小学校付近で採集された幼体がそれらしく思われたが、成体が採れなかつたため今回の目録には載せなかつた。また当日ハマゴミグモと言われた種類はシマゴミグモの誤りと思われるが、熊田・池田の標本には該当の種が無く、確認できなかつたため目録には載せなかつた。他にワシグモの一種の幼体、不明種のオス成体が採れている。

今回の合宿とは別に小田原城内高等学校生物部では1984年8月28日に真鶴町岩地区で、1986年8月20日にサボテンランド付近で夜間採集しているが、その際に成体が採集されていて、今回確認されなかつたクモは次の3種であった。この時の同定は池田が行った。

125. <i>Uroborus varians</i>	ウズグモ	FM(20. Aug. 1986)
126. <i>Episinus mirabilis</i>	ハラナガヒシガタグモ	My (28. Aug. 1984)
127. <i>Neoscona sp.</i>	ヤミイロオニグモの一種	F (20. Aug. 1986)

なお、権田(1972. 真鶴岬、採集者は権田。採集日は31. May. 1970)のリストには6種、池田(1984. 岩地区、採集者は池田。採集日は11. Feb. 1984)の報文には4種の今回確認されなかつた種類が記録されている(学名は報文当時のもの)。

権田(1972)の記録より

128. <i>Ischnothyreus narutomii</i>	ナルトミダニグモ
129. <i>Dipoena flavomarginata</i>	キベリミジングモ

130. <i>Nesticus brevipes</i>	コホラヒメグモ	
131. <i>Cybaeus nipponicus</i>	カチドキナミハグモ	
132. <i>Hasarius adansoni</i>	アダンソンハエトリ	
133. <i>Orthobula crucifera</i>	オトヒメグモ	
池田(1984)の記録より		
134. <i>Oedothorax insectipes</i>	セスジアカムネグモ	F
135. <i>Cornicularia vulgaris</i>	コテングヌカグモ	M
136. <i>Tetragnatha</i> sp.	アシナガグモの一種	y
137. <i>Trachera japonica</i>	ネコグモ	f

ちなみに今回、合宿最終日の午後に回った南足柄市の大雄山では47種を記録したが、新海・熊田(1987)のリストに出ていない種類で今回採れたのは次の3種であった(貞元氏同定)。

<i>Linyphia limbatinella</i>	フタスジサラグモ	y
<i>Synagelides agoriformis</i>	アメイロハエトリ	M
<i>Laufelia aenea</i>	エキスハエトリ	F

参考文献

- 池田博明, 1984. ムラクモヒシガタグモの幼生越冬. *Atypus*, (84):25-26.
 ——, 1989. キハダエビグモの瞬間的体色変化. *Atypus*, (93):7-9.
 権田重雄, 1972. 真正蜘蛛各地の同定目録. *Kishidai a*, (29-32):9-13.
 熊田憲一, 1989. ムラクモヒシガタグモの性モザイク. *Arachnol. Pap. pres. Yaginuma, Osaka*, pp.39-41.
 Matsumoto, S., 1970. Spiders around Ashinoko lake and of Niijima, Manazuru peninsula, Kanagawa Prefecture. *Kishidai a*(16/17), :1-3.
 松本誠治, 1979. 生物の採集地の記号表示(Locality Code)について. 生物地理学会会報, 34(3):21-27.
 貞元己良, 1988. 合宿に参加して. *Kishidai a*, (57):11-12.
 新海栄一・熊田憲一, 1987. 大雄山杉林の真正クモ類. IN:神奈川県指定天然記念物地域動物調査報告書. pp81-97. 神奈川県教育委員会.
 谷川明男. 1989. 田中徳久氏採集による各地のクモ同定記録. *Kishidai a*, (58):50-55.
 梅谷献二・加藤輝代子(編), 1989. クモのはなし I. 技報堂出版. 東京.
 吉田 哉, 1988. 日本産ミジングモ属(真正クモ目:ヒメグモ科)の2新種. *Acta arachnol.*, 36(1):25-31.

—— K I S H I D A I A 投稿規定 ——

1. 投稿資格は本会会員とする。ただし共著者には、会員以外の者を含むことが出来る。依頼原稿については、本会会員でなくとも、運営委員会の承認があればよい。
2. 原稿内容は、クモや東京蜘蛛談話会に関する論文、解説、記録、紀行文、感想などとする。
3. 原稿の採否については、運営委員会にて決定する。また、原稿に対して加筆・削除・修正などをお願いすることがある。
4. 頁数は図表を含めて、刷り上がり 8 頁以内とし、超過頁分は、著者全額負担となる。（現状、一頁につき 2,500 円とするが、印刷費の変更等により、金額が変わることがある。）
5. 特別な費用を要する印刷は、その実費を著者負担とする。
6. 別刷は原稿の一項目の上部に、別刷の必要枚数および表紙の有無を赤字で記入する。（別刷の金額は、全額著者負担とする。）
7. 原稿は、図表・写真も含めたコピー 1 部を添える。

—— 原稿作成上の注意 ——

1. 原稿用紙は、市販の 400 字詰め原稿用紙を使用してください。ワープロの場合は A4 サイズに 40 ~ 44 字 × 36 行を目安とする。
2. 学名などイタリック体を使用する場合には、その下に赤線を引いてください。（学名の場合、属名と種名、それぞれに赤線を引いてください。）
3. 写真は白黒にしてください。図は製図用インクなどにて、墨入れして下さい。
4. 文章は 5 行目から書きはじめ、1 行目にタイトルを 3 行目に著者名を書き入れて下さい。

（1989年4月15日改正）

<1988年・1989年度運営委員>

池田 博明・板倉 泰弘・小野 展嗣・熊田 憲一・笹岡 文雄・新海 明・高橋 登・
谷川 明男・萩本 房枝。

代 表：萱嶋 泉 191 東京都日野市多摩平7-15-9

本 部：小野 展嗣 169 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館動物研究部内

会誌編集：谷川 明男 223 神奈川県横浜市港北区新吉田町1523

通信編集：池田 博明 258 神奈川県足柄上郡大井町金手1099

事務局（会計）：熊田 憲一 221 神奈川県横浜市神奈川区片倉町199

郵便振替 東京 7-74885

会計監査：加藤輝代子・松浦 祐司

編集後記

59号をお届けします。会員の皆様のおかげで順調に発行することができました。本号も飼育記あり、行動観察あり、採集記録ありと、豊富な内容にすることができましたが、Dragline にたくさんの原稿が寄せられたことがなによりでした。これからも、クモについて気づいたこと、小さな発見、疑問などなんでも結構ですどんどんとお寄せください。

KISHIDAIA No.59 1989年12月30日印刷 編集者 谷川明男
1989年12月31日発行 発行者 萱嶋泉
発行所 東京蜘蛛談話会
東京都新宿区百人町3-23-1
国立科学博物館動物研究部 小野展嗣方

印刷所 イチカワ印刷所
〒357 埼玉県飯能市新町24-7

K I S H I D A I A
Bulletin of Tokyo Spider Study Group
No. 59 Dec. 1989

目 次

久保寺みか・池田博明： キニメグモの色彩多型	1
牧 孝匡： オオツチグモの飼育観察記	5
新海 明： イソウロウグモ類による卵のう捕食の観察	9
板倉泰弘： 亜成体に求愛するアオクロハシリグモ	13
新海 明： キシノウエトタテグモ探検会報告	15
板倉泰弘： ウススジハエトリの交接	18
DRAGLINE	
笹岡文雄： 最近見たこと、気づいたこと 2題	19
小野展飼： 貝の中からミズグモ	20
穂部達男： 神奈川県で見つけた珍しいクモ	20
新海 明： シリアゲムシによるクモの餌の強奪	21
稻葉茂代： スネグロオチバヒメグモの交接	21
池田博明： クスミザラグモの交尾時期	22
谷川明男： 神奈川県にまたいたスズミグモ	23
谷川明男： ジョロウグモの対ボルティア逃避行動	23
谷川明男： 箱根仙石原からヒメハナグモ	24
熊田憲一： ヨアシダカグモの集まるトイレ	24
谷川明男： 西表島のクモ類採集記録Ⅰ	25
1988年度合宿報告	
池田博明： 真鶴合宿報告	45
KISHIDATA投稿規定・原稿作成上の注意	
編集後記	53
	54